寺床遺跡

発掘調査の概要―D・E地区―

1982年3月

島根県 東出雲町教育委員会

序

寺床遺跡の発掘調査は、昭和55年度から実施し、当地方では稀にみる４世紀ごろの築造と推測される前期古墳をはじめ、縄文時代から奈良時代に及ぶ数多くの遺構・遺物を確認しました。

なかでも１号墳は、古代出雲における古墳発生過程の問題を解明する上で学術上きわめて貴重な遺跡と判断され、多方面から注目されております。

本書は、１号墳の東麓にあたるＤ地区と北側緩斜面にあたるＥ地区の発掘調査の概要をまとめたものであります。十分な記録とはいえませんが埋蔵文化財研究の資料として多くの方々に活用していただければ幸に存じます。

なお、この調査にあたってご指導、ご協力いただきました島根県教育委員会、地権者をはじめ関係各位に対し、衷心より厚くお礼申し上げます。

昭和57年３月

島根県八束郡東出雲町教育委員会

教育長　宮廻　勝重

例　　言

1.　本書は、東出雲町教育委員会が昭和55・56年度に松江農林事務所の委託を受けて実施した宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う採土予定地内における埋蔵文化財発掘調査の概要である。

2.　調査地点は、島根県八束郡東出雲町大字揖屋字寺床で、次のような調査組織、構成で調査を行なった。

事　務　局　宮廻勝重(教育長)、引野温(教育次長補佐)、古藤勇(主事)

調　査　員　D地区調査担当　黒谷達典(県文化課文化財保護主事)、柳浦俊一(八雲立つ風土記の丘職員)

E地区調査担当　竹中哲(埋蔵調査員)

調査補助員　神田郁子(駒沢大学々生)、落合めぐむ(奈良女子大学々生)、加藤直宏(東海大学々生)

調査協力者　花谷浩(京都大学大学院生)、井上寛光(明治大学々生)、石倉一郎、原田律夫、三宅博士

調査指導者　片寄義春(県文化課文化財保護主事)、勝部昭(同)、松本岩雄(県文化課主事)

なお、調査及び整理にあたっては次の方々からご指導を賜った。(敬称略、順不同)

甘粕建(新潟大学教授)、大塚初重(明治大学教授)、下條信行(平安博物館助教授)、渡辺貞幸(島根大学助教授)、田中義昭(同)、古山学(東京大学文部技官)、前島己基(奈良国立博物館技官)、町田章(奈良国立文化財研究所技官)、山本清(島根大学名誉教授)

3.　石器の材質鑑定については三島欣二氏(県立松江北高等学校教諭)のご助言を賜った。

4.　遺物整理には発掘担当者・調査補助員の他に次のものが参加した。

荒木利幸(早稲田大学々生)、岩田美江子(中央大学々生)

5.　掲載図面は松本岩雄、片寄義春、黒谷達典、竹中哲、柳浦俊一、花谷浩、神田郁子、落合めぐむ、荒木利幸、岩田美江子、宮内美貴子、森山紀美子、小原明美の作図、製図にかかり、写真は松本、竹中、柳浦、井上治夫の撮影になるものである。

6.　遺構は竪穴住居跡SI、溝状遺構SD、土壙SKの略号を遺構番号の前に付した。

7.　本書の作成は、竹中、松本、柳浦の協議をもとに、D地区については柳浦が、E地区については竹中が執筆し、編集は三者で行なった。

目　　次

Ⅰ　調査の経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 4
(1)　Ｄ地区の調査 …… 4
(2)　Ｅ地区の調査 …… 20
Ⅳ　ま　と　め …… 24

挿図目次

第１図　調査区配置図 …… 1
第２図　寺床遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第３図　Ｄ地区遺構配置図 …… 4・5
第４図　Ｄ地区ＳＩ01・02実測図 …… 5
第５図　Ｄ地区ＳＩ01-Ｐ1遺物出土状態 …… 6
第６図　Ｄ地区ＳＩ01出土遺物実測図 …… 7
第７図　Ｄ地区ＳＩ02出土遺物実測図 …… 8
第８図　Ｄ地区ＳＤ01実測図 …… 9
第９図　Ｄ地区ＳＤ01出土土器実測図 …… 10
第10図　Ｄ地区ＳＤ02実測図 …… 11
第11図　Ｄ地区ＳＤ02遺物出土状態 …… 12
第12図　Ｄ地区ＳＤ02出土土器実測図 …… 12
第13図　Ｄ地区ＳＤ03実測図 …… 13
第14図　Ｄ地区ＳＤ03出土土器実測図 …… 14
第15図　Ｄ地区ＳＤ03出土石器実測図 …… 15
第16図　Ｄ地区ＳＤ04実測図 …… 16
第17図　Ｄ地区ＳＤ04出土土器実測図 …… 17
第18図　Ｄ地区ＳＤ04出土石器実測図 …… 18
第19図　Ｄ地区出土土器実測図 …… 19
第20図　Ｅ地区遺構配置図 …… 20・21
第21図　Ｅ地区ＳＫ01実測図 …… 21

第22図　Ｅ地区ＳＫ01出土遺物実測図 …… 22
第23図　Ｅ地区出土土器実測図 …… 23

図版目次

図版１－１　遺跡遠景 …… 1
図版１－２　Ｄ・Ｅ地区調査前の状況 …… 1
図版２－１　Ｄ地区調査後の状況 …… 2
図版２－２　Ｄ地区調査後の状況 …… 2
図版３－１　Ｄ地区調査後の状況 …… 3
図版３－２　Ｄ地区調査後の状況 …… 3
図版４－１　Ｄ地区発掘調査風景 …… 4
図版４－２　Ｄ地区ＳＩ01・02 …… 4
図版５－１　Ｄ地区ＳＩ01・02遺物出土状況 …… 5
図版５－２　Ｄ地区ＳＩ01・02土層 …… 5
図版５－３　Ｄ地区ＳＩ01－Ｐ１遺物出土状況 …… 5
図版６－１　Ｄ地区ＳＤ01 …… 6
図版６－２　Ｄ地区Ｆ１グリッド遺物出土状況 …… 6
図版６－３　Ｄ地区ＳＤ04遺物出土状況 …… 6
図版７－１　Ｅ地区発掘調査風景 …… 7
図版７－２　Ｅ地区発掘調査風景 …… 7
図版８－１　Ｅ地区遺構配置 …… 8
図版８－２　Ｅ地区ＳＫ01 …… 8
図版９　Ｄ地区ＳＩ01･02、ＳＤ01･02出土遺物 …… 9
図版10－１　Ｄ地区ＳＩ01出土凹石 …… 10
図版10－２　Ｄ地区ＳＩ01出土石斧 …… 10
図版10－３　Ｄ地区ＳＩ02出土叩石 …… 10
図版11－１　Ｄ地区ＳＤ03・04出土土器 …… 11
図版11－２　Ｄ地区ＳＤ03･04出土石器 …… 11
図版12－１　Ｄ地区出土土器 …… 12
図版12－２　Ｅ地区ＳＫ01出土石器 …… 12
図版12－３　Ｅ地区Ｅ6･Ｅ7グリッド出土土器 …… 12

Ⅰ　調査の経過

八束郡東出雲町と同郡八雲村との境にある宝満山は、江戸時代末期から昭和21年ごろまで幾度かの休止はあったものの盛んに銅の採掘が行なわれてきた。その後、昭和42年に休止されるまで細々と採掘されてきたが、鉱山から流出した鉱毒は周辺の水田を汚染し、昭和40年代後半には社会問題となった。東出雲町では出雲郷（あだかい）地区がそれにあたる。そこで、当町では国、県の補助をうけて公害防除事業として汚染水田に客土することとなり、その採土地として寺床丘陵（島田採土地）が選定された。

この丘陵上には事業に先立つ分布調査で古墳の存在が確認されたため、東出雲町教育委員会は松江農林事務所の委託を受けて昭和55年に発掘調査を実施した。昭和55年度は７月10日から丘陵頂部に位置する１号墳の調査に着手したが、調査の途中で丘陵東側斜面において土器片が採集されたことから、この地点を「Ｄ地区」として急遽調査を行なうこととなった。調査は寒風吹きすさぶ悪条件のもとで昭和56年１月12日から3月4日まで実施された。調査の結果、竪穴住居跡、溝状遺構など各種の遺構を検出したのをはじめ、多数の遺物が出土した。

第１図　調査区配置図　1：2000
（▒ 本書収録地区）

こうしたことから「D地区」と類似した地形を呈している丘陵北側斜面にも遺構の存在が予想されるに至り、丘陵斜面および崖面を綿密に観察した結果、その地点からも土器片が採集された。そこで調査区を「E地区」として昭和56年度に発掘調査を実施することとなった。調査期間は昭和56年8月5日から11月25日までを要した。

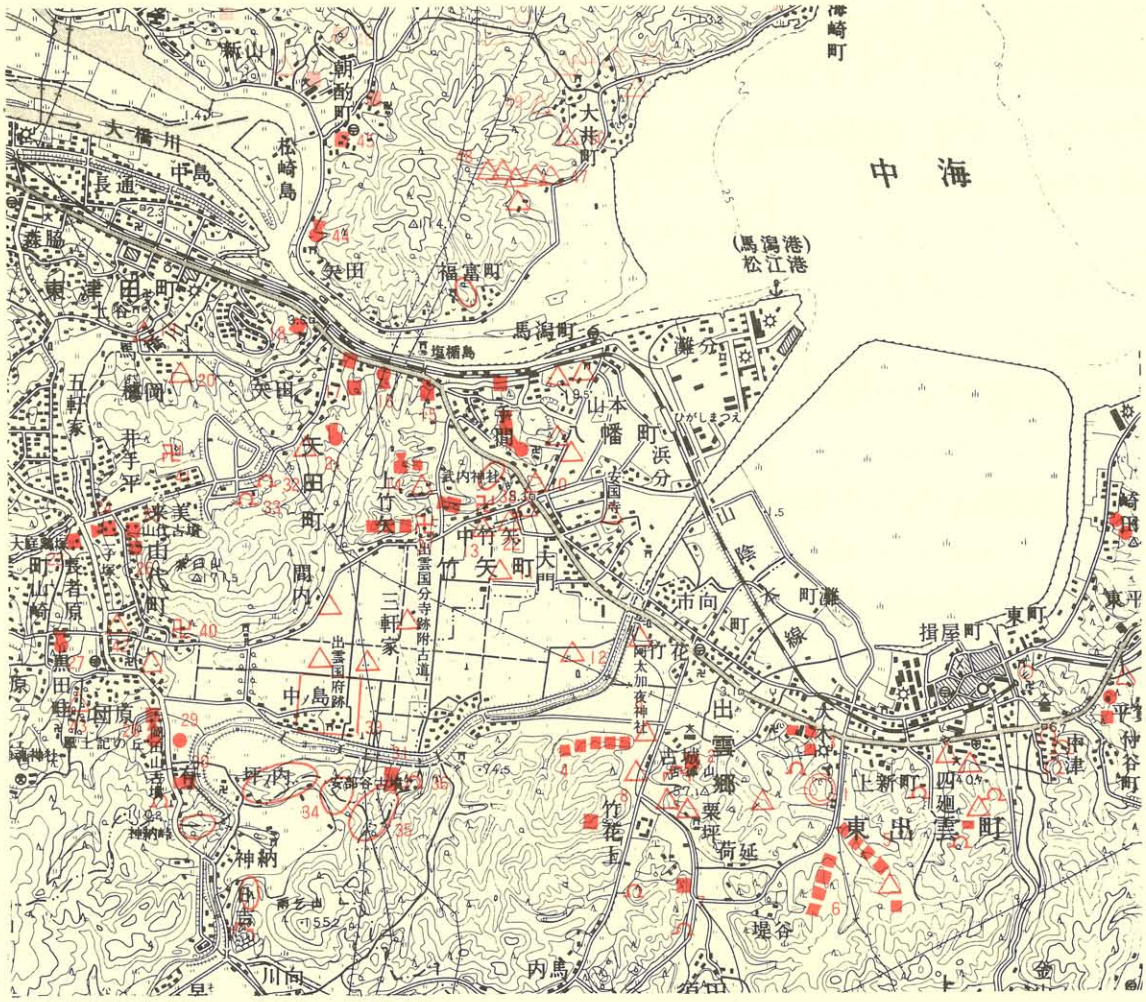
II　位置と歴史的環境

この遺跡は意宇川下流平野東端の丘陵に位置し、所在する地籍は島根県八束郡東出雲町大字揖屋字寺床2925-1ほかである。標高25mあまりの丘陵上からは東方に大山が遠望され、眼下には中海を介して北方に島根半島の山並みが展開している。まさに眺望絶景の地で、古代海上交通の要地ともいうべき位置を占めている。

この周辺は縄文時代以降多数の遺跡が分布しており、出雲地方のなかでも特に遺跡密集地として知られているところである。縄文時代の遺跡としては、前期の土器を出土した竹の花遺跡、後期の土器を出土した才の峠遺跡、晩期の土器を出土した春日遺跡などがある。

弥生時代になると、春日遺跡、磯近遺跡、古城山遺跡、夫敷遺跡、布田遺跡、中竹矢遺跡、宮内遺跡、石台遺跡などが知られ、遺跡は山麓線沿いからさらに平野の中央部へと分布の広がりをみせ、その数も前時代より増加の傾向をたどる。また、松江市竹矢町の平浜八幡宮には付近から出土したといわれる細形銅剣が伝わっている。しかし、次の古墳時代に比べると遺跡数はまだ貧弱で、特に弥生時代前期の遺跡は少なく、中海南岸地域ではこれまでのところ低湿地あるいは微高地に立地する石台遺跡、布田遺跡でわずかに遺物の出土が知られているにすぎない。

古墳時代になると、古墳を主として遺跡の数は急激に増加する。今のところ意宇川下流平野周辺では寺床1号墳以外に典型的な前期古墳は発見されていないが、前期には古城山古墳、大木権現山1号墳などの中小規模古墳が知られている。古城山古墳は一辺約20mの方墳で、舶載の内行花文鏡が出土している。大木権現山1号墳は23.1m×12.2mの長方形墳で、5基の木棺を直葬した埋葬施設が確認されている。なお、やや離れるが遺跡の東方約6kmの安来市荒島町には寺床遺跡と同様に中海を見おろす丘陵上に竪穴式石室を内部構造とする大成古墳（方墳52×46m）、造山1号墳（方墳60×60m）、造山3号墳（方墳58×44m）など出雲地方でも代表的な前期古墳が存在している。中、後期になると鶏塚古墳（方墳、44×42m）や県下最大の規模を誇る山代二子塚古墳（前方後方墳、全長約90m）をはじめ、石屋古墳（方墳40×39m）、竹矢岩船古墳（前方後方墳、全長約50m）、手間



第２図　寺床遺跡と周辺の遺跡 1：50000

1．寺床遺跡　2．古城山古墳　3．大木権現山古墳群　4．姫津古墳群　5．渋山池古墳群　6．安垣古墳群　7．栗坪古墳　8．竹の花遺跡　9．春日遺跡　10．的場遺跡　11．布田遺跡　12．夫敷遺跡　13．中竹矢遺跡　14．才ノ峠遺跡　15．竹矢岩舟古墳　16．手間古墳　17．井ノ奥古墳群　18．石屋古墳　19．石台遺跡　20．勝負遺跡　21．平所遺跡　22．宮内遺跡　23．鶏塚古墳　24．山代二子塚古墳　25．山代方墳　26．山代円墳　27．東淵寺古墳　28．岡田山古墳群　29．岩屋後古墳　30．御崎山古墳　31．古天神古墳　32．十王免横穴群　33．狐谷横穴群　34．西百塚山古墳群　35．東百塚山古墳群　36．安部谷横穴群　37．出雲国分寺跡　38．出雲国分尼寺跡　39．出雲国府跡　40．四王寺跡　41．来美廃寺　42．山代郷正倉跡　43．黒田畦土居遺跡　44．魚見塚古墳　45．岩屋古墳　46．廻原古墳　47．ババタケ窯跡　48．岩汐窯跡　49．寺尾窯跡　50．廻谷窯跡

古墳（前方後円墳、全長約70ｍ）、井ノ奥４号墳(前方後円墳、全長約57.5ｍ)などの大規模な古墳が意宇川下流平野に造られるようになる。また、古天神古墳(前方後方墳、全長約25ｍ)、山代方墳(方墳、一辺約45ｍ)、岩屋後古墳(墳形不明)、山代円墳(墳形不明)、栗坪古墳（方墳、一辺約14ｍ）など切石を使用した、いわゆる石棺式石室を内部構造にもつもののほか、県下最大級の古墳群である百塚山古墳群や十王免横穴群、狐谷横穴群など

も造られる。このようにこの時期には首長級の古墳をはじめ多くの古墳が築造され、後の出雲国の中心的な位置を占めるようになる。後世この地に国庁が設置され名実ともに出雲国の政治、文化の中心地として盛行した基礎はこの時期に培われたものと考えることができよう。

律令制時代になると、平野南部中央の大草町に国庁が置かれ、平野北東の山麓には出雲国分僧寺、尼寺が建立されている。そして、それらの運営に伴い、周辺には多くの官人、仕人が居住していたと思われる。今のところそうした律令制時代の集落跡といったものはあまり発見されていないが、最近国分僧寺の北側にあたるオノ峠遺跡で検出された掘立柱建物群はその可能性のある遺構として注意される。また、律令財政を考える上で重要な遺跡として山代郷正倉推定地がある。意宇川下流平野西北端の低丘陵上にあるこの遺跡は、昭和53～55年にわたる発掘調査により一辺1.3～1.5mの巨大な方形の柱掘り形を持つ3×4間の総柱の倉庫跡4棟をはじめ管理棟と考えられる建物跡などが確認され、『出雲国風土記』記載の方向、里程などから山代郷にあった正倉にあたる可能性の高いものとして国指定史跡になったものである。

本遺跡は概ね以上のような歴史的環境のもとに営まれている。しかし、遺跡の密集地でありながら今のところ弥生時代の遺構が検出された例は少なく、特に前期の遺構はほとんど知られていない。

III　調査の概要

(1)　D地区(第3図)

この調査区は、丘陵東側にあたる標高14.5mから8mの緩斜面に位置している。斜面のため若干の土砂の流出はあったと思われるが、後世の大がかりな改変を受けた痕跡は認められず、全体の地形は遺跡のつくられた時期と大差ないものと考えられる。

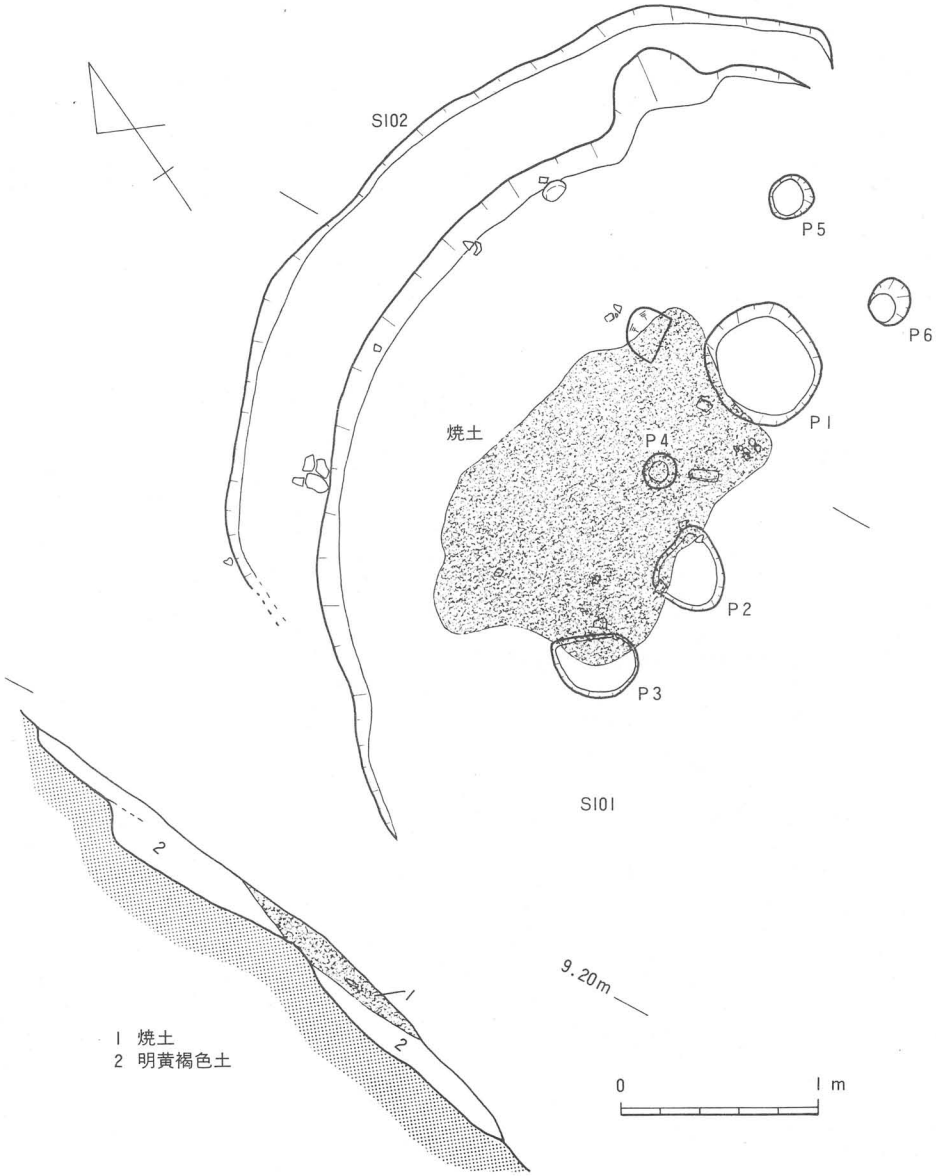
調査にあたっては対象地区全域に、南北線を磁北にとり、これと直交する東西線を座標軸に5×5mの方眼を組んでグリッドの1単位とした。グリッド設定にあたっては調査区北西を起点にして、東側に向って5mおきにA、B、C……、南側に向って5mおきに0、1、2……として、北西コーナーの交点をもってグリッド名とした。なお、この調査区のうち東西線1以北はすでに重機によって攪乱を受けていること、南北線A以西は急斜面で業務災害の発生する恐れがあったため安全を考慮した上でその部分の調査は実施しなかった。

第３図　D地区遺構配置図

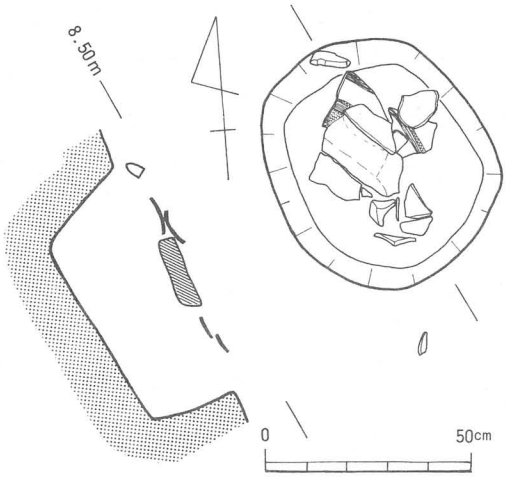
Ｄ地区では２ヵ所の調査区を設定して調査を実施した。このうち斜面南寄りのやや東方に張り出した緩斜面に設定した調査区では土器片が数点出土したが、遺構は確認することができなかった。斜面北寄りに設定した調査区はやや谷になった緩斜面にあたり、竪穴住居跡３、溝状遺構10、土壙５などの各種遺構を検出したのをはじめ縄文土器、弥生土器、石器など多数の遺物が出土した。

以下、検出遺構と出土遺物の概要を列記することにする。

ＳＩ01(第４図)　調査区の東端、標高約９ｍの緩斜面に位置しＳＩ02と重複して確認された。斜面のため３分の２が流失しており、東壁と南壁は確認できなかったが残存部分か



第４図　Ｄ地区SI 01・02実測図



第５図　D地区SI01-PI遺物出土状態

ら推定すると平面形は円形またはだ円形と思われる。その規模は壁の北端と南端を結ぶ長さが約4.4ｍである。壁は、ＳＩ02によって削平されたこともあって、わずかに北壁で0.1～0.2ｍ、西壁で0.1～0.2ｍ確認されただけであった。住居跡内の土層は明黄褐色土層一層のみが観察できた。周溝は検出されず、明確な柱穴も認められなかったが、円形または不整形のピットが６個検出された。いずれも斜面で検出されたため、深さは0.5～0.15cmで上部は流失したと思われる。

出土遺物は、壺、甕または壺の底部、石皿状石製品、抉入り柱状片刃石斧、凹み石などがある(第６図)。壺、底部、石皿状石製品、抉入り柱状片刃石斧はＰ１上面から出土しており、ＳＩ01に伴うものと思われる(第５図)。凹み石は北壁際の床面から出土しており、やはりこれもＳＩ01に伴うものと考えられた。第６図１は最大径65cmの大型の壺である。頸部から胴部にかけて多条のヘラ描き平行沈線が３段に施され(上、中段11本、下段９本)、各段の下には三角形の刺突文が施されている。上段と中段の間には縦方向のヘラ描き沈線２本と綾杉文が施文されている。調整は外面が全面をヘラ磨き調整、内面がナデ調整でていねいに仕上げられている。内外面ともわずかにハケ目が残っており、ヘラ磨き調整の前にハケ目調整が行なわれていたことがわかる。胎土は大粒の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で固く焼き締っており、色調は赤褐色を呈している。器壁は約1.2cmでかなり厚い。

同図２は底径7.7cmの甕あるいは壺の底部である。平高台状の厚くしっかりした底部から内湾気味にすんなりと伸び、胴部はあまり張らないように思われる。調整は風化が著しく不明である。胎土は大粒の砂粒を多く含んでいる。焼成は不良で非常にもろく、色調は黄褐色を呈している。

同図３は長さ10.4cm×8.5cm、厚さ約５cmの凹み石である。円礫を利用したもので全面かなり平滑である。両面中央部には凹みがみられ、周辺には打痕などの使用痕がみられる。石材は流紋岩質と思われる。

同図４は長さ14.1cm×23cm、厚さ約７cmの石皿状石製品である。一面のみが使用されているが、かなり使い込んでいるらしく滑々している。２ヵ所を集中的に使用したものと思

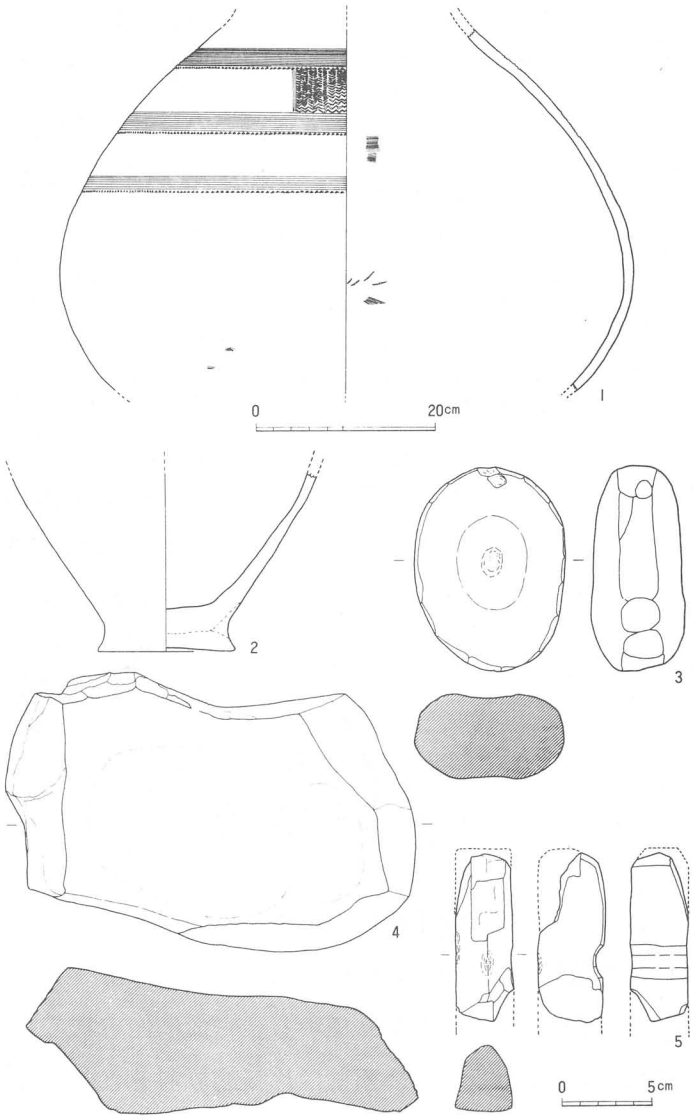
われ、凹みが２つみられる。石材は砂岩質と思われる。

同図5は残存長9.5cm、幅3.2cm、厚さ3.6cmの抉入り柱状片刃石斧である。両端は欠損している。抉りは角のとれた台形を呈し、断面は三角形である。全面をていねいに研磨しているが、風化のため擦痕等はみられない。石材は流紋岩質、または硬質砂岩質と思われる。

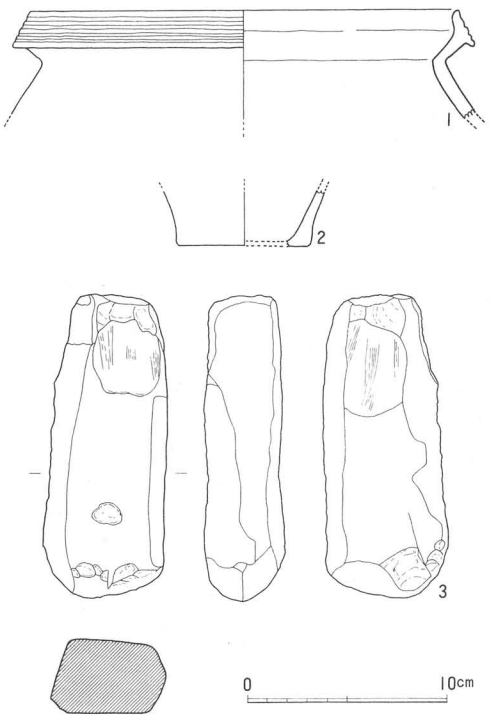
出土土器からＳＩ01は弥生時代前期末のものと考えられる。

ＳＩ02（第４図）

ＳＩ01と重複して作られている。ＳＩ01同様３分の２が流失しており、東壁と南壁は確認できなかった。残存部分から推定すると平面形は円形またはだ円形と思われる。その規模は壁の北端と南端を結ぶ線が約3.9ｍである。壁はその大部分が流失しており、北壁で0.05～0.15ｍ、東壁で0.1～0.15ｍが確認されただけであった。床はほぼ水平であるが、ＳＩ01の壁沿いに幅約0.4ｍの範囲で確認されたにすぎない。ＳＩ01の覆土を床として利用していると思われるが土層の観察では確認できなかった。中央では約1.7ｍ×1ｍの範囲で焼土が確認された。床面と同一レベルであることからＳＩ02と関係あるものと思われる。住居跡内の土層はＳＩ01同様明黄褐色土層である。なお、本住居



第６図　Ｄ地区SI01出土遺物実測図



第７図　Ｄ地区SI02出土遺物実測図

跡からは周溝も柱穴も検出されなかった。

出土遺物は焼土の中及び上面から甕、壺または甕の底部、石器が出土している（第７図）。第７図１は復元口径21.4cmの甕である。頸部は「く」の字形で、口縁部は上下に拡大し、内傾している。口縁部には４条の凹線文が入っている。風化が著しく調整は不明である。胎土は石英、赤褐色の砂粒などの小砂粒を含んでいる。焼成は不良で灰黄色を呈している。

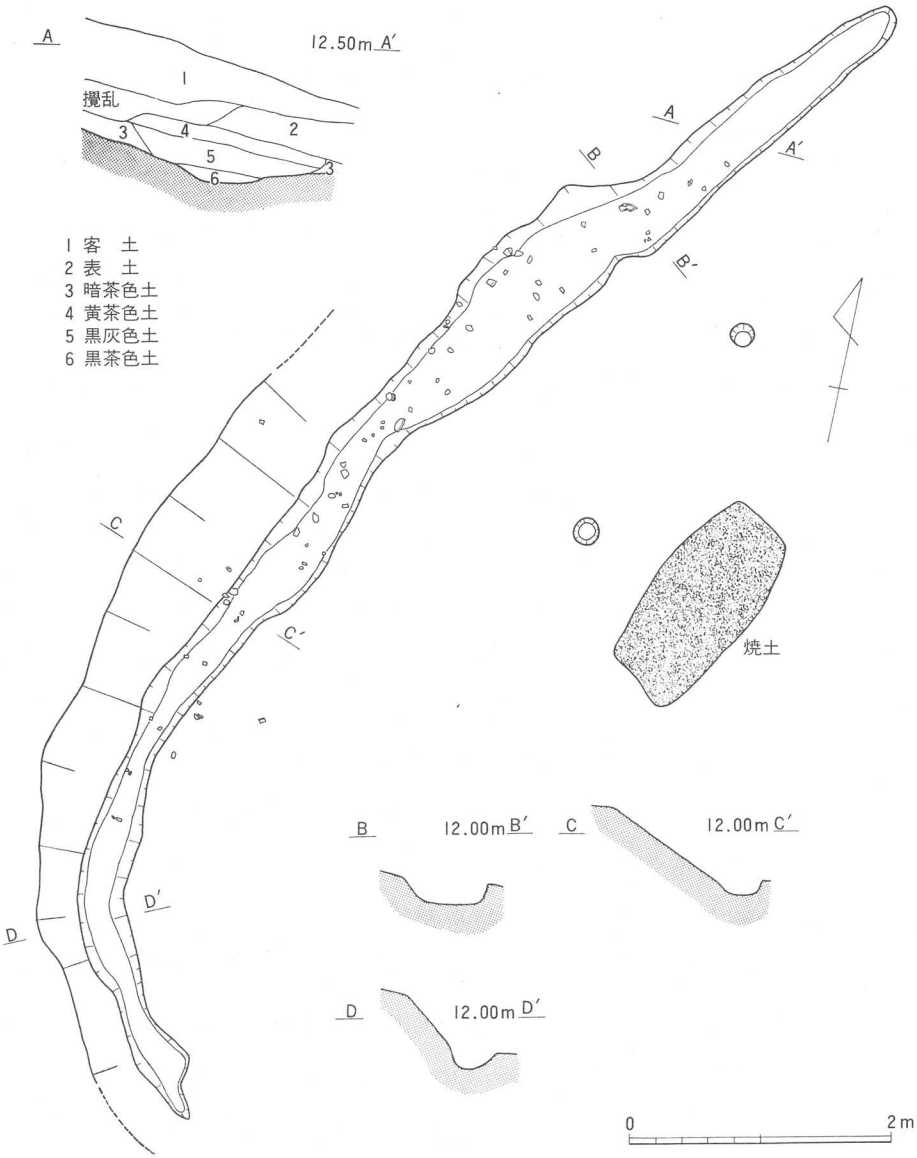
同図２は復元底径5.4cmの壺または甕の底部である。平底で胴部はわずかに外反して伸びる。調整は外面が縦方向のヘラ磨き、内面はヘラ削り調整が施されている。胎土は小砂粒を含んでいる。焼成は良好で色調は黒灰色である。

同図３は長さ15.2cm、幅6.1cm、厚さ4.1cmの柱状の石器である。各側面とも平滑で擦痕がみられ、両端部には打痕と思われる痕跡がみられる。用途は明確ではないが、端部の打痕などから、叩石の一種ではなかろうか。

出土土器からＳＩ02は弥生時代中期後葉のものと考えられる。

ＳＤ01（第８図）　標高約12ｍの緩斜面に等高線に沿って南北方向に弧状に掘り込まれた溝状遺構で断面「Ｕ」字形を呈している。斜面に作られているため谷側の壁（東壁）はわずかしか確認できなかったが、西壁は比較的原形をとどめていると思われた。西壁掘り込みの傾斜は、上半はややゆるやかであるが、溝底近くでは急角度になっている。検出し得た溝状遺構の規模は北端と南端を結ぶ線が約10.1ｍである。幅は上縁0.6～1.3ｍ、下縁0.15～0.6ｍであるが、土層観察によるともとは北端で1.9ｍ以上あったと思われる（第８図土層Ａ－Ａ′）。壁高は西壁で0.4ｍ～0.65ｍ、東壁で約0.04～0.1ｍである。溝底の高さは北端部から南端までほとんどかわらない。ＳＤ01周辺の基本的な土層は近年の造成で盛られた約0.4ｍの赤褐色土、表土（厚さ約0.2ｍ）、暗茶色土（約0.1～0.2ｍ）、地山となっている。遺構確認面は地山面であるが土層の観察によると、ＳＤ01は表土（厚さ約0.25ｍ）の下に堆積した暗茶色土層上面から掘り込まれており、溝内には下から黒茶色土、黒灰色土、黄茶色土の順で堆積している。

なお、ＳＤ01とどのような関係をもつのか現状では確認できなかったが、ＳＤ01の東側



第８図　D地区SD01実測図

に隣接して約４×７ｍの範囲で平坦面が確認され、そこに1.5×0.8ｍの範囲で焼土の検出されたことが注意される。

遺物（第９図）は溝底近くから壺、甕、高坏、壺または甕の底部が出土している。第９図１、２は復元口径がそれぞれ17.2cm、16.2cmの類似した形態をもつ壺である。ともに頸部がゆるく外反し、口縁部は上下に拡大し内傾している。口縁部には５条、頸部には２条以上の凹線文が入っている。２は風化が著しく調整は不明だが、１は比較的保存状態が良い。１の頸部にはハケ目調整を施した後にヨコナデ調整が施されている。頸部外面には縦方向

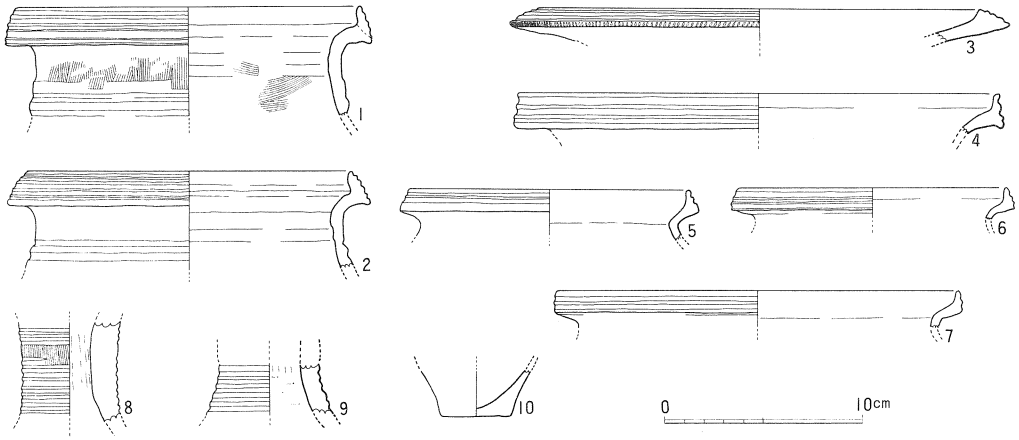
のハケ目がよく残り単位は13本である。頸部内面はややていねいにヨコナデ調整されており、横方向のハケ目がわずかに残る程度である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。1、2ともに胎土は石英、長石、赤褐色砂粒などの小砂粒をわずかに含んでいる。焼成は良好で、色調は1が赤褐色、2が白黄色を呈している。

同図3は復元口径が22cmの壺である。口縁部は大きく開き、端部は肥厚し凹線文が4条入っている。凹線文直下にはヘラによる刻み目文が入っている。調整は風化が著しく不明である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で色調は白黄色を呈している。

同図4は復元口径22.2cmの壺の口縁部片である。口縁部は3と同様に大きく開くが、端部は上下に幅広く拡大し、3条の凹線文が入っている。器面の風化が著しく調整は不明である。胎土はやや大粒の砂粒を含み、焼成は比較的良好である。色調は黄褐色を呈している。

同図5～7は甕である。復元口径は5が14.2cm、6が13.4cm、7が20.2cmを測る。いずれも頸部は「く」の字形になり、口縁部は上下に拡大しわずかに内傾する。口縁部には7に3条、5・6に2条の凹線文が入っている。いずれも器面の風化が著しく調整は不明である。5・6・7ともに胎土には砂粒を含み、焼成は不良で色調は暗褐色を呈している。

同図8・9は高坏の脚部である。8は中央部の復元径4.8cmである。外面はハケ目調整の後に11条の凹線文が認められるが、上から4条目の凹線文は途中で切れ、一周していない。内面は上部3分の2が未調整で絞り目がよく残っている。下部は横方向にヘラ削り調整が施されている。胎土は石英、長石などの砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。9は上端の復元筒径5.1cm筒部から裾部に移る部分で、「ハ」の字形をなす。外面には6条の凹線文が認められる。内面はほぼ全面にヘラ削り調整が施されているが、上端にはわずかに絞り目が残っている。胎土、焼成、色調は8にきわめて類似していることから両



第9図　D地区SD01出土土器実測図

者は同一個体の可能性もある。

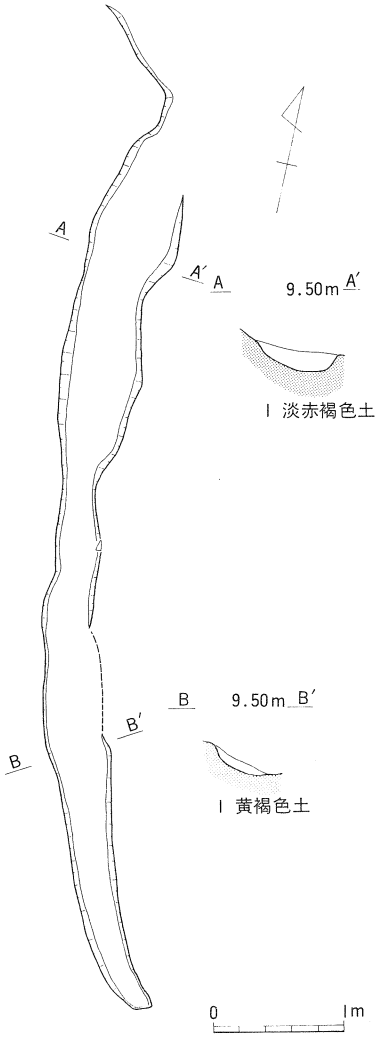
同図10は復元底径3.6cmの壺または甕の底部である。底部は平底で、胴部は内湾気味に伸びる。調整は風化が著しく不明である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で色調は赤褐色を呈す。

出土土器の特徴からＳＤ01は弥生時代中期後葉のものと考えられる。

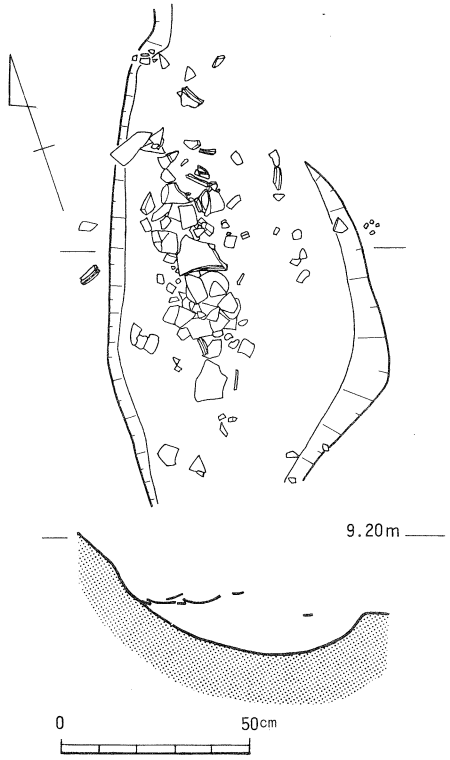
ＳＤ02(第10図)　標高約９ｍの斜面に等高線に沿って南北方向に弧状につくられた溝状遺構で、断面「Ｕ」字形を呈している。ＳＩ01･02の南側約3.6ｍ、ＳＤ01の東側約10ｍに位置し、ＳＤ03に隣接している。規模は長さ約7.7ｍ、深さ0.05～0.15ｍで、幅は上縁で0.2～0.7ｍ、下縁で0.2～0.5ｍを測る。壁の遺存状態は極めて悪く、最も残りの良い部分でも壁高は0.15ｍにすぎない。溝底は中央部から南端に向かって次第に低くなっており、高低差は約15cmある。土層は上層から、近年の造成による赤褐色の客土(厚さ約0.2ｍ)、表土（約0.3ｍ)、暗茶褐色土（約0.2ｍ)、暗褐色土（約0.3ｍ)、暗黄褐色土（約0.05～0.2ｍ)、地山面となっており溝内には南側に黄褐色土、北側に淡赤褐色土が堆積していた。溝の上部は流失しており平面の観察からも、土層の観察によっても遺構は地山面でしか検出できなかった。

ＳＤ02の東側に隣接してＳＤ01の場合と同様に約３×６ｍの範囲で平坦面が確認されている。

遺物は、甕と壺または甕の底部が出土している（第12図)。出土地点は本溝の北よりの地点からかなりまとまって出土しているが（第11図)、図示できるのは第12図に掲載したもののみである。同図１～３は甕で、１は復元口径20.8cmのやや大型、２、３は復元口径14cm、11.4cmの小型品である。いずれも頸部は「く」の字形で、口縁部は上下に拡大し内傾している。口縁部には１・２は２条、３は３条の凹線文が入っている。１・２は風化が著しく調整は不明であるが、３は口縁部内外面ヨコナデ調整、胴部内面はハケ目調整の後にヨコナデ調整が施されている。なお、頸部内面にはわずかにハケ



第10図　D地区SD02実測図



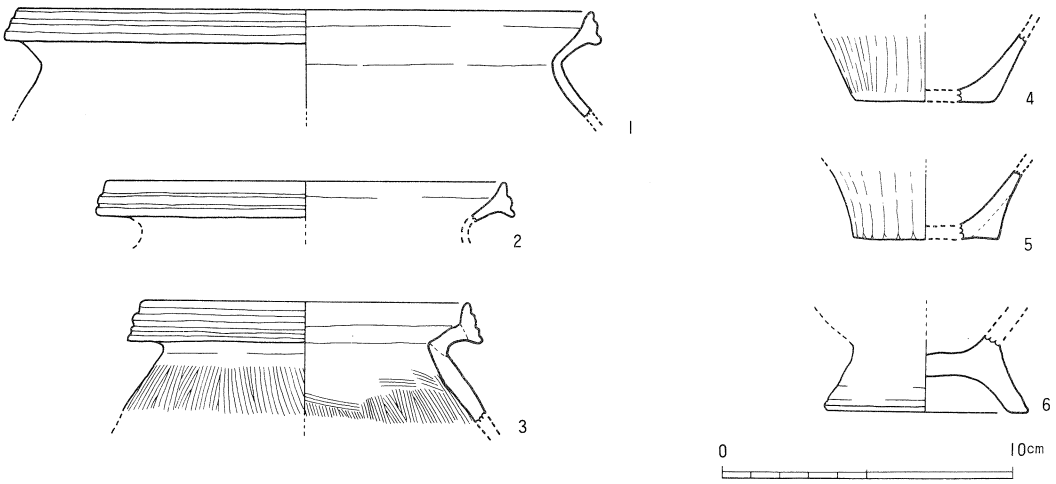
第11図　D地区SD02遺物出土状態

目が残り、口縁部内面には爪で押圧した痕跡が明瞭である。胎土は長石、石英などの小砂粒をわずかに含んでいる。焼成は２、３は良好であるが、１は不良でもろい。色調は１、２が黄褐色、３が灰白色を呈している。

同図４、５は壺または甕の底部で、復元底径は４が4.7cm、５が５cmである。ともに平底であるが、４は胴部が内湾気味に伸び、５は胴部が外反して伸びる。５は丸底ふうの底部を作り、さらに周辺部に粘土を貼り付けてしっかりした平底を作ったと思われる。ともに調整は内面と底部外面の風化が著しく不明であるが、外面は縦方向のヘラ磨きである。胎土は３は小砂粒、４は大粒の砂粒を含んでいる。焼成はともに良好で、色調は黒灰色を呈している。

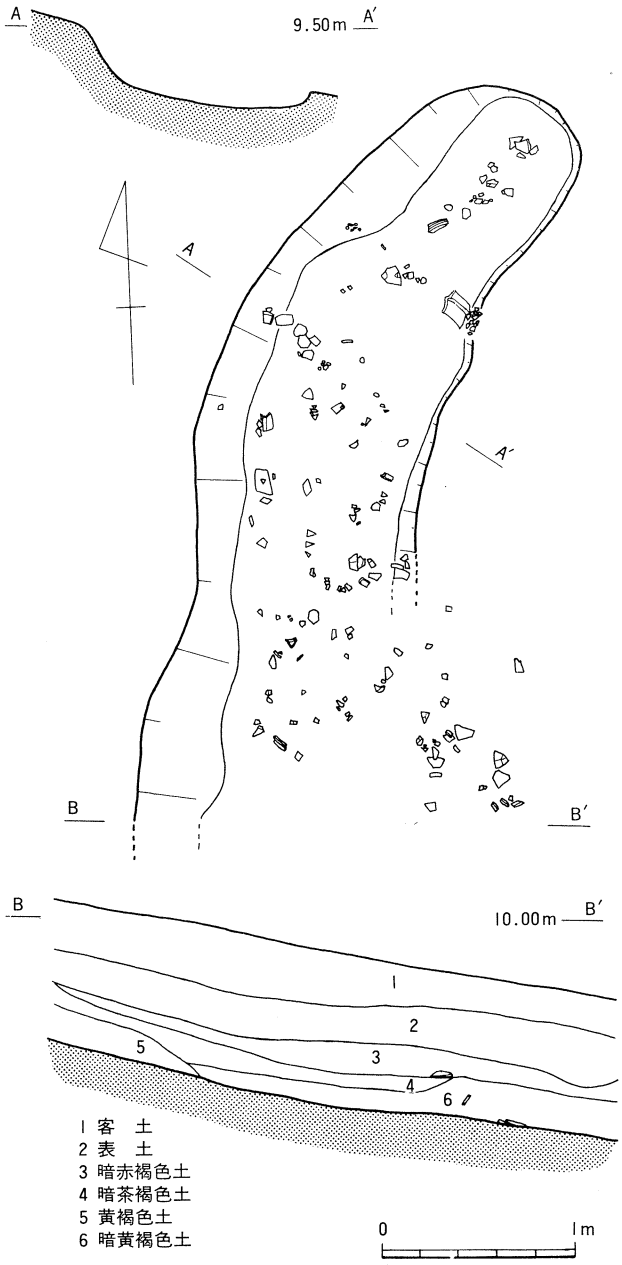
同図６は脚付の壺または甕の底部である。底径は７cm、脚高２cmで、脚は「ハ」の字形にしっかりとふんばっている。風化のため内面の調整は不明だが、底部外面はヨコナデ調整、脚外面はヨコナデ調整、内面はヘラ削り調整が施されている。

出土土器から、ＳＤ02は弥生時代中期後葉のものと考えられる。



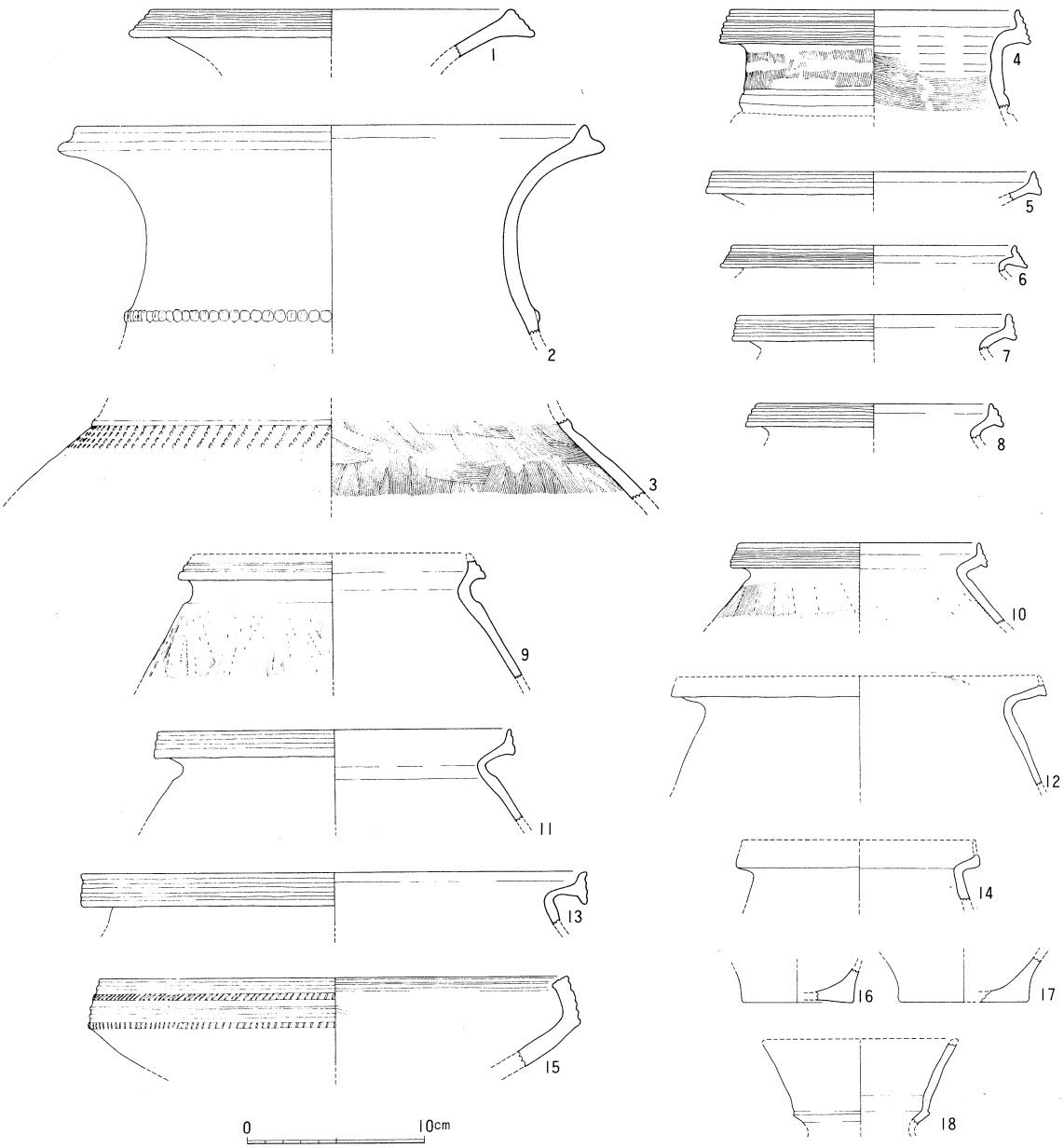
第12図　D地区SD02出土土器実測図

ＳＤ03(第13図)　標高約10ｍの斜面に等高線に沿って南北方向にわずかに弧状に掘り込まれた溝状遺構で断面は「Ｕ」字形を呈している。南側にはＳＤ02、東側にはＳＤ04が隣接し、両溝のちょうど中間に位置する。さらに本溝の東側約0.7ｍにはＳＩ01、02がある。検出し得た規模は長さ約4.4ｍ、幅は上縁で約0.9～1.2ｍ、下縁で0.6～0.8ｍ、深さ0.04～0.3ｍを測る。壁高は西壁で約0.2ｍ、東壁で約0.04～0.15ｍである。溝底は南から北に向かって次第に低くなっており、高低差は約15cmある。溝内には径14～20cmのピットが４個検出されたが、本溝に関係あるものか否かは不明であった。周辺の土層は、上層から、近年に造成されて盛られた赤褐色客土(厚さ20～30cm)、表土（約20cm)、暗赤褐色土（5～15cm)、暗茶褐色土（5～15cm)、暗黄褐色土(10～20cm)、黄褐色土(約20cm)でその下は地山面となっている。溝内には暗黄褐色土が堆積していた。土層の観察によればＳＤ03は地山上に堆積した黄褐色土上面から掘り込まれていることがわかるが、平面的には地山面でしか遺構を検出することができなかった。したがってＳＤ03の南半は溝底が地山面まで達していなかったため検出することができなかった。



第13図　D地区SD03実測図

出土遺物は壺、甕、高坏、



第14図　D地区SD03出土土器実測図

壺または甕の底部（第14図）、石器（第15図）がある。第14図１は復元口径20.6cm、２は28.8cmの壺である。ともに口縁部が大きく外反し、端部は肥厚する。口縁端部には１に４条、２に１条の凹線文が入っている。２は頸部に指頭圧痕文帯が貼り付けられている。1・２とも風化が著しく調整は不明である。胎土はともに砂粒を含む。焼成は１が良好で、２はやや不良である。色調はともに黄褐色を呈している。

同図５は復元口径18.2cmの壺である。1・２と同様に口縁部が大きく開き、端部は肥厚し、

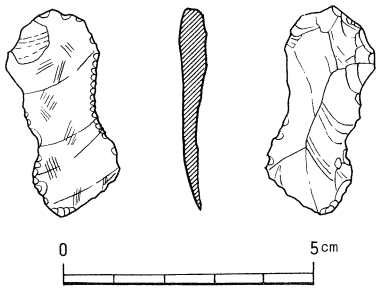
そこに２条の凹線文が施されている。風化が著しく調整は不明。胎土は石英、長石、赤褐色砂粒などの小砂粒を含む。焼成はやや不良で、色調は白黄色を呈する。

同図４は復元口径16.4cmの壺である。頸部はゆるく外反し、口縁部は上下に拡大し内傾している。口縁部には５条、頸部には２条以上の凹線文が入っている。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。頸部は外面には縦方向にハケ目調整を施した後簡単にヨコナデ調整、内面には上半にヨコナデ調整、下半に横方向にハケ目調整が施されている。胎土は小砂粒を多く含み、焼成は良好で色調は黄褐色を呈している。

同図３は、上端径26.6cmの壺の肩部である。「ハ」の字状に広がり、胴部はかなり張ると思われる。上端に１条の凹線文が残っている。凹線文の直下には単位４の櫛状工具による刺突文がめぐらされている。調整は外面は風化が著しく不明瞭であるが、わずかにハケ目調整が残っている。内面は縦方向のハケ目調整が施され、一部がナデ調整で消されている。胎土は石英、赤色砂粒などの砂粒を含んでいる。焼成は良好で色調は黄褐色を呈している。

同図６～14は甕である。甕には口径13～16cmの小型のもの（６・７・８・９・10・14）と、口径18～21cmの中型のもの（11・12）、口径28cmあまりの大型のもの（13）がある。いずれも頸部は「く」の字形になり、口縁部は上下に拡大し内傾している。12、14は口縁部欠損のため凹線文の有無は不明であるが、９・11は２条、７・８・13は３条、６・10は４条の凹線文が口縁部に入っている。風化が著しいものが多く調整は明瞭ではないが、口縁部から頸部にかけて内外面ともヨコナデ調整のようである。胴部は外面縦方向のハケ目調整（９・10）、内面縦方向のハケ目調整（10）が施されている。胎土はいずれも石英、長石、赤褐色砂粒などの小砂粒を含んでいる。焼成は６・７・10は良好で、８・９・11～14は不良である。色調は黄褐色ないしは白黄色を呈している。

同図15は復元口径26.6cmの大型の高坏坏部である。体部は内湾気味に伸び、口縁部は屈曲し、逆「く」の字形となる。口唇部は平坦で断面は方形である。口縁部には５条、口唇部には３条の凹線文が入っている。また口縁部の上から２条目と３条目の凹線文の間と、口縁部と体部の境の屈曲部には、ヘラによる刻み目文がめぐらされている。調整は口縁部内面がハケ目調整の後にヨコナデ調整が施されており、わずかに口縁部内面にハケ目が残っている。体部は内外面ともヘラ磨き調整が施されている。胎土は小砂粒を含み、焼成は良好で色調は灰色を呈している。



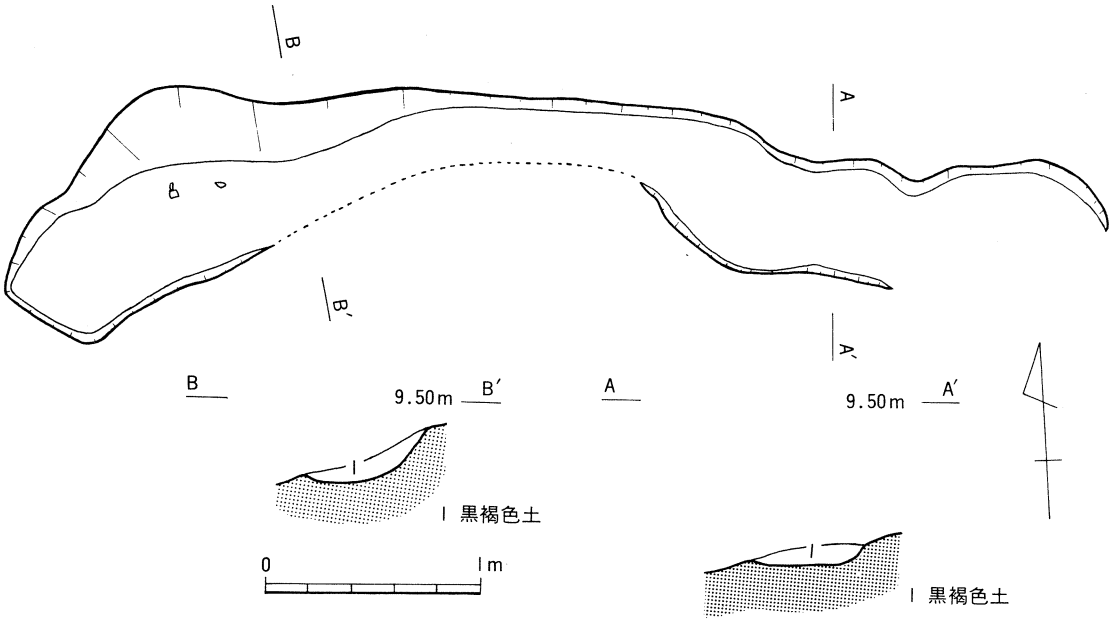
第15図　D地区SD03出土石器実測図

同図16、17は復元底径がそれぞれ6.3cm、7.4cmの壺または甕の底部である。ともに平底で、胴部は外反気味に伸びる。ともに風化が著しく調整不明の箇所が多いが、16の底部外面はヨコナデ調整が施されている。胎土は石英、長石などの砂粒を含んでいる。焼成は16は良好であるが17は不良である。色調はともに灰褐色である。

同図18は復元口径が約11.2cmで、口縁部が逆「ハ」の字形に大きく開く複合口縁の壺である。風化が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部内面はヨコナデ調整が施されている。胎土は長石、石英などの小砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、色調は赤黄褐色を呈す。この土器はＳＤ03内から出土しているが、他の遺物に比べればかなり高い位置にあった。また古式土師器の特徴をそなえていることなどから混入品の可能性が強いものと考えられる。

第15図は黒曜石の縦長剥片である。長さ4.1cm、幅1.4～1.8cm、厚さ0.1～0.6cmである。打面は自然面で、主要剥離面と同方向の剥離が反対面に数面認められる。両側縁は抉入り状になり、細かい歯こぼれ様の剥離がみられる。両側縁を刃部とした刃器と思われる。

ＳＤ03の出土土器は、第14図18以外はすべて弥生時代中期後葉のものと考えられる。前述のとおり出土状態などから第14図18は混入と考えられることから、ＳＤ03はほぼ弥生時代中期後葉と考えてよかろう。



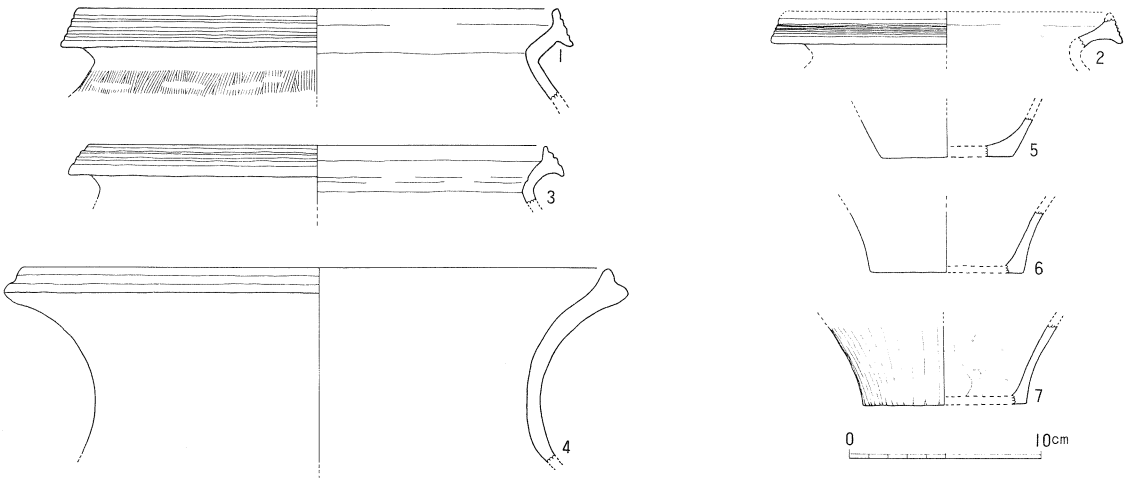
第16図　D地区SD04実測図

ＳＤ04(第16図)　標高約9.5ｍの斜面に東西方向にわずかに弧状に掘り込まれた溝状遺構で、断面「Ｕ」字形を呈している。ＳＤ03の東側に隣接し、ＳＩ01､02の北側約0.6ｍに位置している。遺存状態は非常に悪く南壁中央部と南壁東側は確認できなかった。検出し得た規模は長さ約5.1ｍ､幅は上縁で約0.6～0.9ｍ､下縁で約0.4～0.5ｍで深さ約0.1ｍである。壁は北壁で0.05～0.15ｍ、南壁で約0.05ｍある。遺構は地山面で確認され、溝内には黒褐色土が堆積していた。溝底は西から東にかけて次第に低くなり、高低差は約0.5ｍある。前述のとおり東壁は確認できなかったが、本溝の東側延長線上に遺物が帯状に散布していたことから、本溝は本来もっと東側まで延びていたものと思われる(図版6-3)。

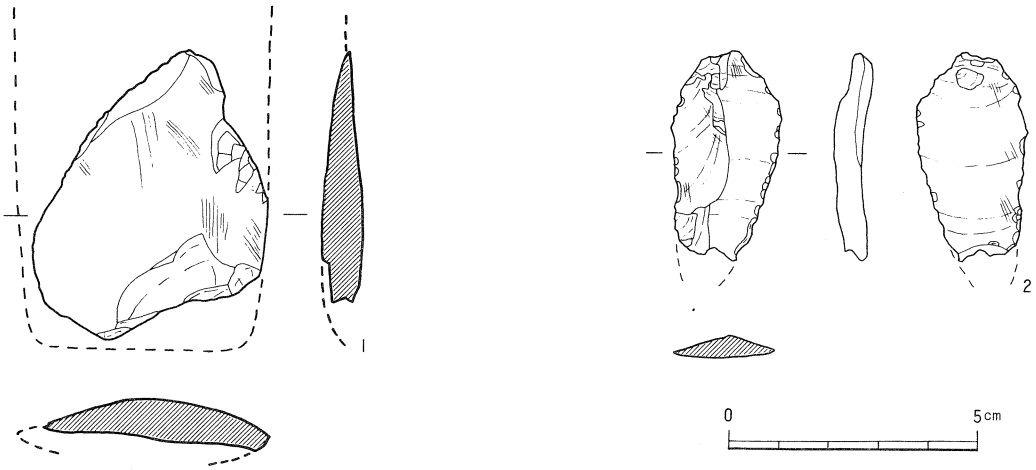
遺物としては、壺、甕、壺または甕の底部､石器(第17･18図)が出土している。第17図４は復元口径30.6cmの大型の壺である。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚して１条の太い凹線文が入っている。調整は全面風化が著しく不明である。胎土は石英などの砂粒を含み焼成は不良で色調は黄褐色を呈している。

同図１～３は甕である。１は復元口径25cm、３は23.8cmの大型、２は約17cmの中型である。いずれも頸部は「く」の字形で、口縁部は上下に拡大し内傾している。口縁部には1･２は４条、３は３条の凹線文が施されている。調整は、いずれも風化している部分が多いため不明瞭だが、口縁部から頸部にかけては内外面にヨコナデ調整が施されていると思われる。１の胴部外面には縦方向のハケ目調整が施され、部分的にヨコナデ調整で消されている。

同図５～７は壺または甕の底部で、復元底径は５が6.8cm、６が８cm、７が8.6cmである。いずれも平底であるが、５は胴部が内湾気味に伸び、６・７は胴部が外反気味に伸びる。



第17図　D地区SD04出土土器実測図



第18図　D地区SD04出土石器実測図

調整は、５・６は風化が著しく不明であるが、７は内面ヘラ削り調整、胴部外面は縦方向のヘラ磨き調整が施されている。いずれも胎土は石英、長石などの砂粒を含んでおり、焼成は良好である。色調は５・６が黄褐色、７は黒灰色を呈している。

第18図１は残存長５cm、幅２～4.6cm、厚さ0.2～0.9cmの石斧の破片と思われる。一面のみが原状をとどめ、擦痕が認められる。石材は流紋岩質と思われる。

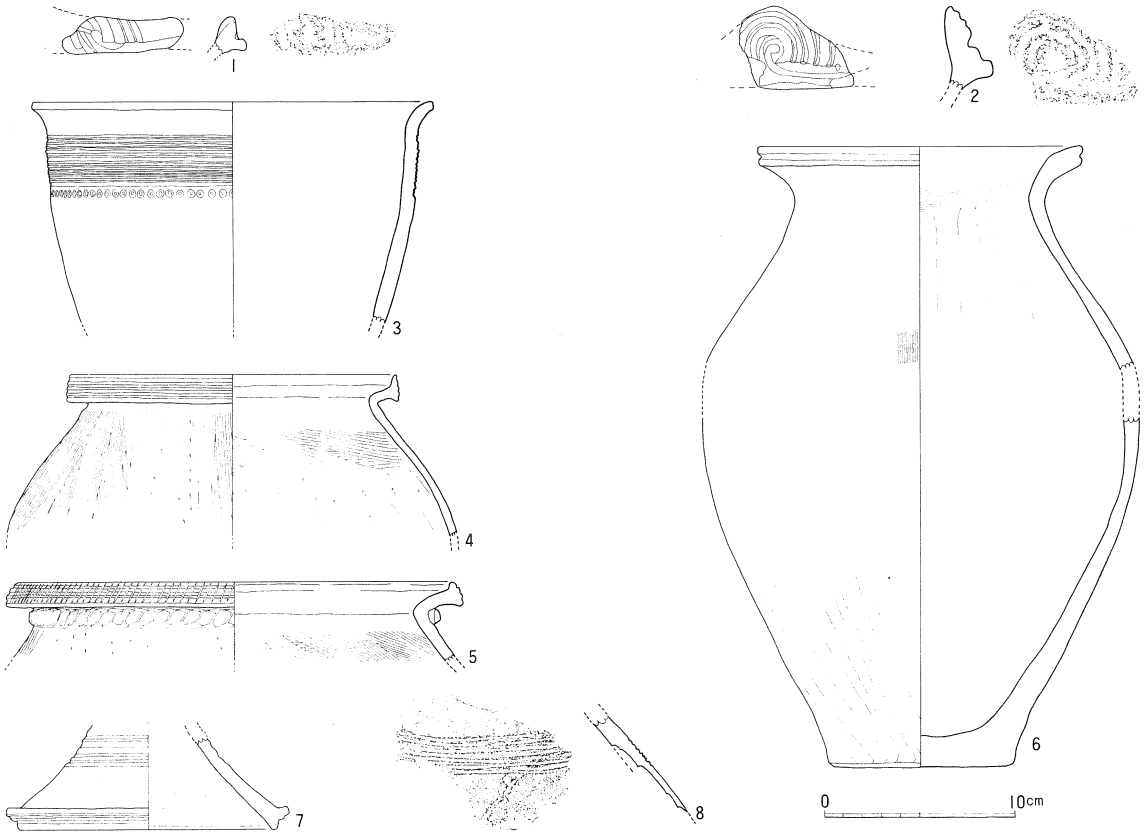
同図２は黒曜石製の縦長剥片である。長さ4.2cm、幅0.9～2.2cm、厚さ0.4～0.6cmである。打面は自然面で主要剥離面と同一方向の剥離が反対面に数面みられる。両側縁には細かい歯こぼれ様の剥離がみられる。両側縁を刃部とする刃器と思われる。

出土土器から、ＳＤ04は弥生時代中期後葉のものと思われる。

その他の遺物　遺構には伴わないが、Ｄ―１・２、Ｅ―２グリットを中心に土器、石器が出土している。そのすべてを掲載する余裕はないが、代表的なものを選び図示、記述することにする。

第19図１・２は小片であるが、深鉢の口縁部である。口縁部は肥厚しており、いわゆる縁帯文土器に分類されるものである。文様は竹管状の工具による太い沈線文を主体とし、渦巻き状をなしている。１・２とも胎土は砂粒を多く含み、焼成は非常に悪くもろい。色調は黒褐色を呈している。これらの文様は、山陽地方の彦崎ＫＩ式と類似していることから、縄文時代後期中葉のものと考えられる。

同図３は復元口径21cmの甕である。胴はあまり張らず、口縁部は短く外反している。胴部には12条のヘラ描き平行沈線文が入っている。沈線文の直下には竹管による刺突文がめぐっている。調整は風化が著しく不明であるが、内面に粗いハケ目がわずかに残っている。胎土は大粒の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈している。多条の



第19図　D地区出土土器実測図

ヘラ描き平行沈線が入っていること、胎土に大粒の砂粒を含んでいることなどから、この土器は弥生時代前期末のものと考えられる。

同図８は小片であるが、壺の胴部である。７条のヘラ描き平行沈線が施されている。調整は外面にヘラ磨き調整、内面にナデ調整が施されている。胎土は大粒の砂粒を多く含み焼成は良好で、色調は茶褐色を呈している。胴部に７条のヘラ描き平行沈線文が入っていること、胎土に大粒の砂粒が含まれていることから弥生時代前期末のものと考えられる。

同図６は口径17.2cm、高さ約32cmの壺である。胴部はあまり張らず、すんなりとしている。口縁部はゆるく外反して伸び、端部はやや肥厚している。底部はしっかりした平底でやや厚手である。口縁端部にはヘラによる太い沈線文が１条施されている。風化が著しく調整は不明瞭だが、外面は胴部にわずかにハケ目が残り、下半にはヘラ磨き調整が認められる。内面は頸部に横方向のハケ目調整が施され、頸部から胴部上半には指で押圧した痕跡がみられる。胎土は大粒の砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈している。この土器は、形態は弥生時代中期初頭のものとよく似ているが、口縁端部にヘラ描き沈線文が入ること、胎土に大粒の砂粒が含まれていること、器壁が厚手であることなどから、

弥生時代前期末と思われる。

同図４・５は復元口径がそれぞれ17cm、22.8cmの甕である。ともに頸部は「く」の字形で、口縁部は上下に拡大して内傾している。口縁部には４は４条、５は３条の凹線文が施されている。また５には頸部に指頭圧痕文帯が貼り付けられており、口縁部には凹線文の上からヘラによる刻み目文が施されている。４・５とも調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデ調整、胴部外面は縦方向にハケ目調整、胴部内面上半は斜方向にハケ目調整が施されている。４の胴部内面下半には縦方向にヘラ削り調整が施されている。胎土はともに石英などの砂粒を含むが、５は特に多く含んでいる。焼成は４・５とも良好で色調は黄褐色を呈している。これらの土器は口縁部が上下に拡大し凹線文が入っていること、胴部上半にハケ目調整、下半にヘラ削り調整が施されていること、などから弥生時代中期後葉のものと考えられる。

同図７は底径13.4cmの高坏の脚部である。「ハ」の字状に広がり、端部は肥厚している。上部には４条以上、肥厚した端部には２条の凹線文が入っている。調整は、端部は内外面ともヨコナデ調整だが、外面は縦方向のヘラ磨き調整、内面は横方向のヘラ削り調整が施されている。胎土は石英などの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。この土器は、端部は肥厚して凹線文が入っていることなどから、弥生時代中期後葉のものと思われる。

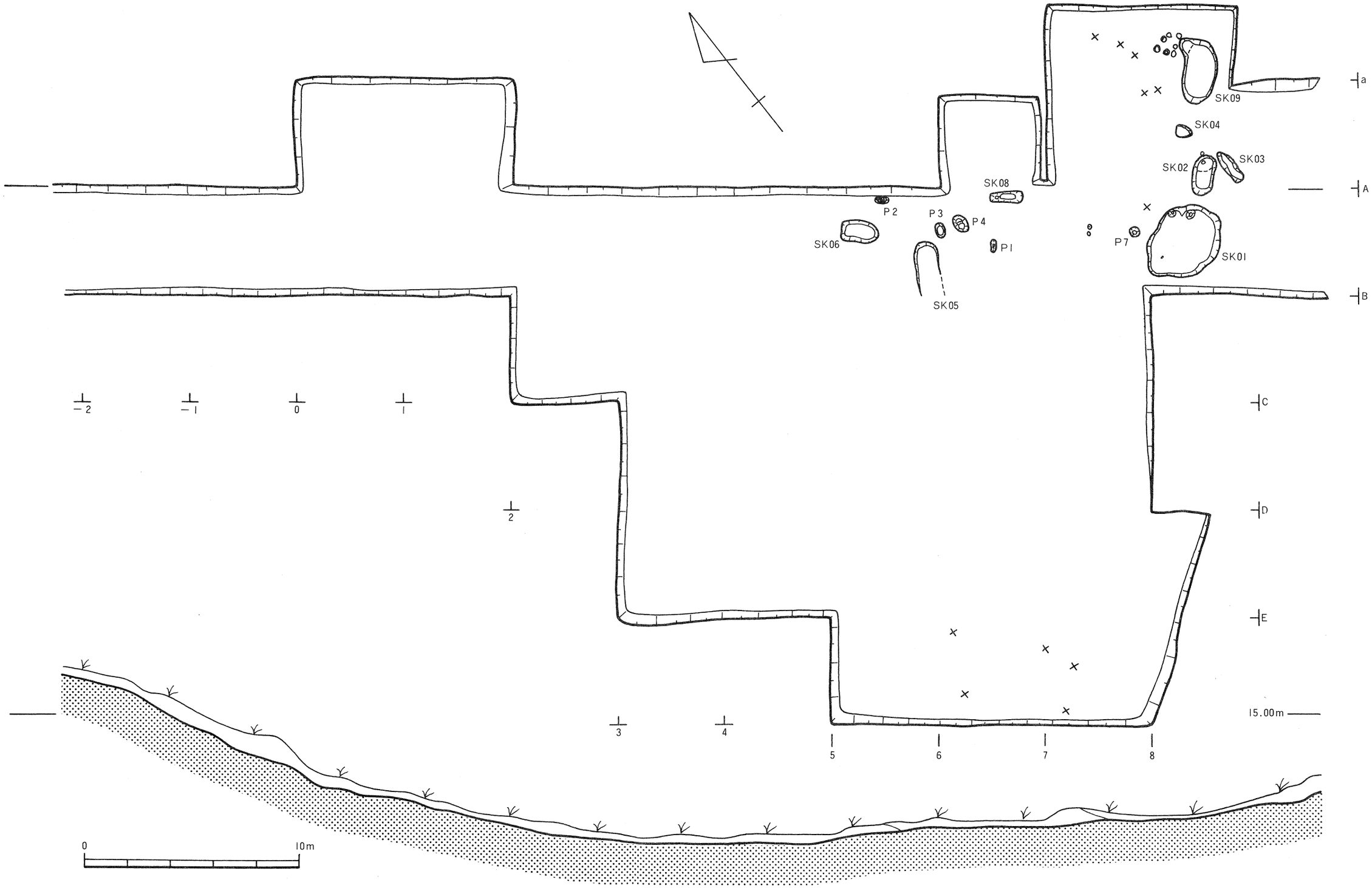
(2)　Ｅ地区の調査（第20図）

この地区は丘陵の北側緩斜面にあたり、標高10ｍ～15ｍあまりに位置している。擂り鉢状を呈した谷に立地しており、現水田面との比高差は約７ｍである。調査前の状況は、竹や低い灌木、雑草に覆われていた。調査区中央に溝が南北に掘削されていた。これは、後世に果樹園として利用されたためで地形が若干損われていた。

調査にあたっては便宜上丘陵斜面全体に５ｍの方眼を設定して発掘を順次行なった。グリッドはＡ－Ｏを基点に南へＢ、Ｃ、Ｄ、…、西へ１、２、３、…とし、地区の名称を北西の交点の座標で呼ぶことにした。

調査の結果遺構、遺物は調査区東半分に集中して検出された。検出した遺構は土壙９、ピット７である。

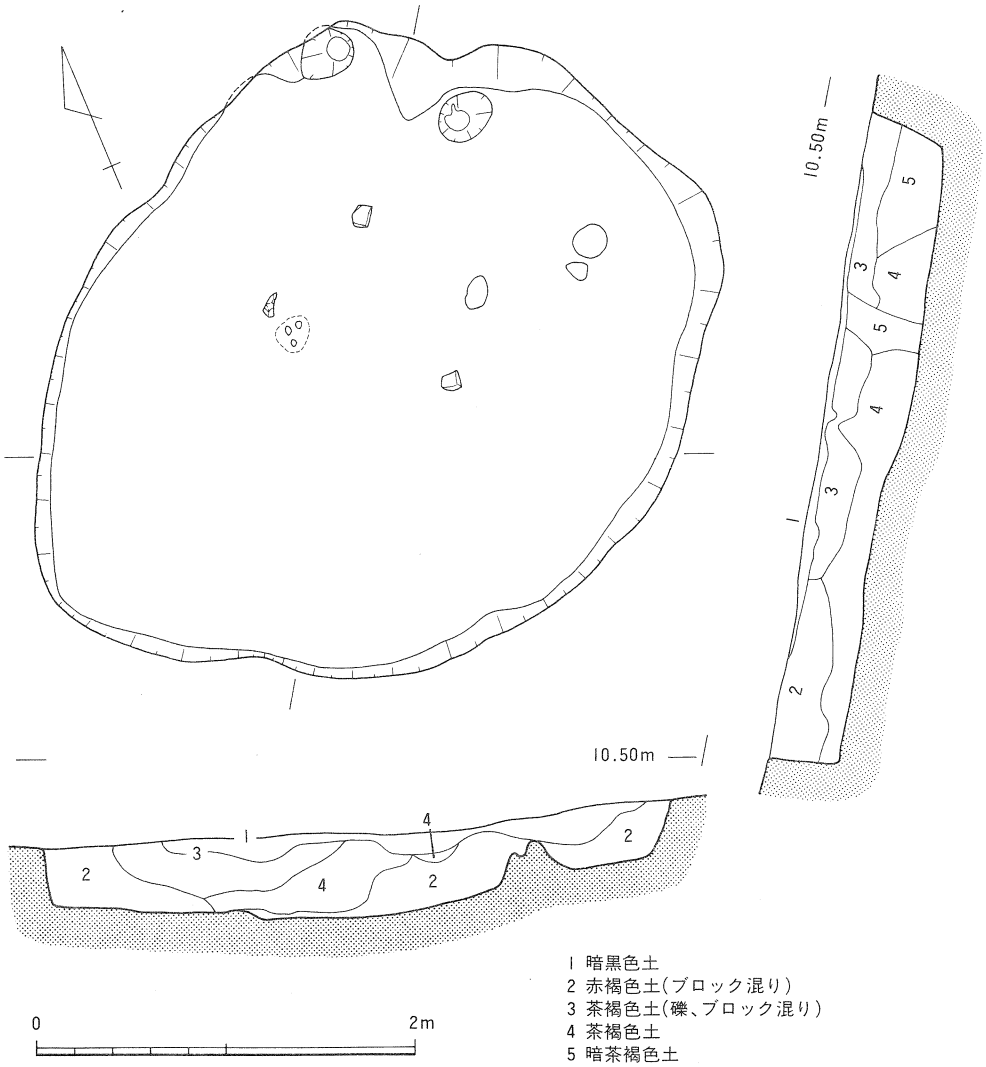
なお、Ｅ－６、Ｅ－７グリッドでは土師器が出土したが遺構を確認することができなかった。



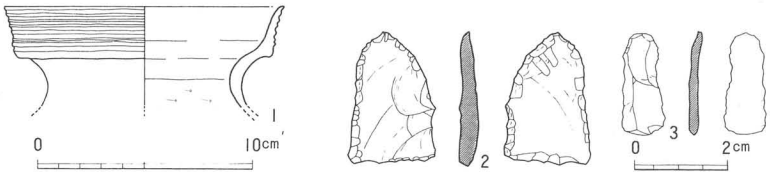
第20図　E地区遺構配置図（×印 土器出土地点）

ＳＫ01（第21図）　調査区北東寄り、標高10ｍあまりの緩斜面に位置している。平面形は不整円形を呈し、検出した土壙のうち最大の規模をもつ。規模は長径3.9ｍ、短径3.0ｍ、深さ0.35～0.45ｍを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、土壙底面は凹凸が著しい。土層は、上層に0.05～0.10ｍの厚さで暗黒色土が堆積し、その下には赤褐色土、茶褐色土、暗茶褐色土が複雑にみられた。遺物は暗黒色土中から弥生土器、土師器、石器などが数点出土している。

第22図１の壺は頸部がゆるく外反し、口縁部が上方に広がる複合口縁である。復元口径13cmで、口縁部には７本の櫛描き平行沈線が入っている。風化が著しく、調整は不明な部分が多いが、内面頸部以下はヘラ削り調整がみられる。



第21図　E地区SK01実測図



第22図　E地区SK01出土遺物実測図

同図2・3の石器はいずれも黒曜石製である。2は長さ5.4cm、幅3.5cmの不整三角形を呈するものである。周辺を二次加工しており、石鏃の未成品と思われる。3は縦長の剝片で、片面には主要剝離面と同一打点と思われる同方向の剝離面が3面みられる。側縁には刃こぼれ様の剝離がみられる。

1の壺は弥生時代後期のものと考えられるが、ほかに、同一の層中から土師器片も出土しており、この土壙の時期については断定しかねる。

SK02　SK01の北側約0.5mに位置している。小判形を呈し、底面は凹凸が著しい。規模は長径1.8m、短径0.95m、深さ0.2mを測る。土層の観察によれば、土壙北側に黒褐色土の落ち込みがみられ、別の遺構が重複していたものと思われた。土壙内には地山ブロックを含む暗褐色土がみられた。遺物は出土していない。

SK03　SK02の東側約0.2mに隣接して掘り込まれている。長さ1.7m、幅0.4mあまりの長方形を呈し、深さは0.2mを測る。底面はやや凹凸があり、上層は炭化物を含む黒褐色土層が厚さ約0.04mみられ、下層は地山ブロックを含む暗褐色土層が観察された。遺物は出土していない。

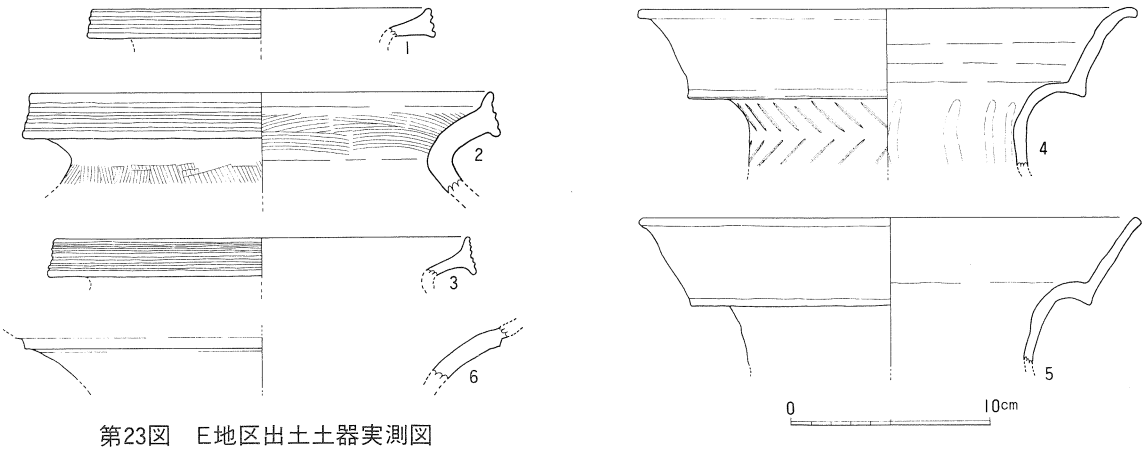
SK04　不整円形を呈する小規模な土壙である。長径0.8m、短径0.66m、深さ0.16mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は上層が炭化物を含む黒褐色土層で、下層は暗褐色土層である。遺物は出土していない。

SK05　完掘はしていないが、隅丸長方形の土壙と考えられる。長辺1.45m以上、短辺1.05m、深さ0.6mを測る。土壙内には暗褐色土中に暗茶褐色土を霜降り状に含む層がみられた。壙内からは黒曜石屑片が出土した。

SK06　SK05の北西約2.1mに位置する小判形の土壙である。長径1.6m、短径0.9m、深さ0.12～0.18mを測る。壙内にはSK05と類似した暗褐色土中に暗茶褐色土を霜降り状に含む層がみられ、黒曜石屑片が数点出土した。

SK08　長辺1.3m、短辺0.4mの長方形を呈し、深さ0.21mを測る。土壙の西側はP5と重複していたが、前後関係については確認することができなかった。遺物は出土していない。

SK09　小判形を呈する土壙で、長径2.9m、短径1.5mを測る。遺物は出土していない。



第23図　E地区出土土器実測図

その他の遺構　前述した土壙のほかにピット７が検出されている。ピットは不整円形ないしはだ円形のもので径0.22～0.75ｍあまりのものがある。ピットの配置には規則性がみられず、性格は不明である。また、いずれも遺物は出土していない。

その他の遺物（第23図）　遺構に伴わないが、Ｅ６・Ｅ７ グリッドで土器が出土している。

１・３は壺あるいは甕の口縁部である。１は復元口径17cmで、口縁端部が肥厚し、３条の凹線文が入っている。調整は内外面ともヨコナデ調整がなされている。胎土は石英等の砂粒を含み、焼成は良好で、黄褐色を呈す。

３は復元口径20.8cmで、口縁端部は上下に拡大し６本の平行沈線を施している。調整は内外面ともヨコナデ調整がなされている。胎土は石英、長石などを含み、焼成は良好で、黄茶褐色を呈す。

２は復元口径23.2cmの甕で、頸部はゆるい「く」の字形をなし、口縁端部は上下に拡大し、やや内傾する。口縁部には４条の凹線文が入っている。調整は、口縁部外面と内面の上半にヨコナデ調整がなされている。口縁部内面下半から頸部にかけては粗い横方向のハケ目調整、頸部以下は外面縦方向のハケ目調整、内面ヘラ削り調整がなされている。胎土は石英、赤色砂粒を含み、焼成は良好で、黄茶褐色を呈す。

４・５は複合口縁の壺である。４は口径25.1cmで、頸部にハケ目原体による綾杉文が施されている。口縁部内外面ともヨコナデ調整がなされ、頸部内面には指頭圧痕がみられる。胎土は小砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈す。

５は復元口径25.2cmで、４とほぼ同形、同大のものである。調整は風化が著しく不明である。胎土は小砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈する。

６は須恵器の甕片である。外面には鋭い凸線がめぐっている。調整は内外面とも回転ナデ調整が施されている。胎土はほとんど砂粒を含まず、焼成は良好で、白灰色を呈す。

Ⅳ まとめ

以上、寺床遺跡D・E地区における調査の概要を記してきた。調査の結果、竪穴住居跡、溝状遺構などを検出したのをはじめ、縄文時代から弥生、古墳時代にわたる各種の遺物が出土した。

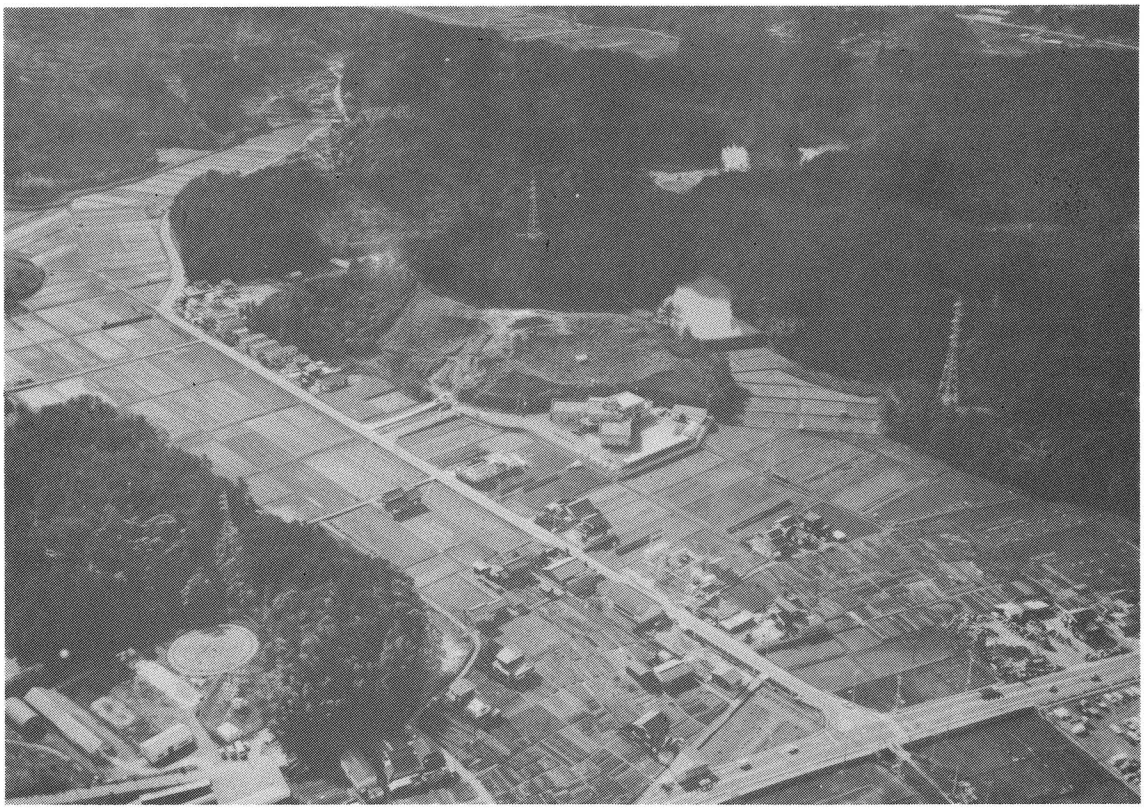
なかでも特に注目すべきは、D地区で検出された弥生時代前期末の竪穴住居跡(ＳＩ01)であろう。これまで県下では弥生時代前期の遺跡はかなり発見されているものの、住居跡として明確に確認されたのは本例がはじめてといえる。しかも大陸系磨製石器といわれる抉入り柱状片刃石斧が伴出しているなど当地域における初期稲作農耕文化の伝播、展開等の問題を考える上で貴重な知見が得られたものといえる。また、県内の弥生時代前期の遺跡は、古浦遺跡(八束郡鹿島町)、タテチョウ遺跡(松江市西川津町)、布田遺跡(松江市竹矢町)、石台遺跡(松江市東津田町)、原山遺跡(簸川郡大社町)、鰐石遺跡(浜田市治和町)などが知られているが、これらはいずれも低湿地あるいは砂丘に立地している。これに対して本遺跡のＳＩ01は丘麓に立地していることが注意される。一般に弥生時代前期の遺跡は低湿地に立地し、集落が丘陵上に移るのは中期以降といわれているが、本遺跡のように狭隘な谷部縁辺の丘麓にも前期の集落が立地しているとすれば、今後そうしたところにも注意を払う必要があろう。

このほか、弥生時代中期後葉の竪穴住居跡(ＳＩ02)、溝状遺構(ＳＤ01・02・03・04)も注意すべき遺構といえよう。斜面に立地しているため部分的にしか残存していなかったが、ＳＩ02の山側にあたる北から西側にかけてＳＤ04・03がめぐっており、それらの位置関係及び出土土器の特徴などからすれば、これらは一連のものと考えた方がよさそうである。また、ＳＤ02の東側では3×6mの範囲で平坦面が確認されており、そこから弥生時代前期及び中期後葉の土器が出土している。この平坦部では竪穴住居跡といったものは確認できなかったが、ここには弥生時代中期後葉の建物があったものと想像され、それを取り巻くようにしてＳＤ02が設けられていた可能性が強い。さらに、ＳＤ01についてもその東側に平坦面、焼土、弥生時代中期後葉の土器がみとめられたことから同様のことが推察される。したがって、D地区で検出した溝状遺構はＳＩ02とＳＤ03・04の関係にみられるように、斜面を平坦に造成して住居を建て、その山側に排水等を考慮して設けられたものと推測される。

以上、部分的な調査結果とはいえ、県内での弥生時代集落の検出例が少ないなかにあって、本遺跡は今後の弥生時代研究を進める上で貴重な資料を提供したものといえよう。

(参考文献) 東森市良ほか「弥生式土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ』昭和52年３月。
佐原真、金関恕編『古代史発掘』4 昭和50年１月 講談社。

図　　版



1．遺跡遠景（北東から）

2．D・E地区調査前の状況（北東から）

図版 2

1．D地区調査後の状況（東から）

2．D地区調査後の状況（南から）

1．D地区調査後の状況（北から）

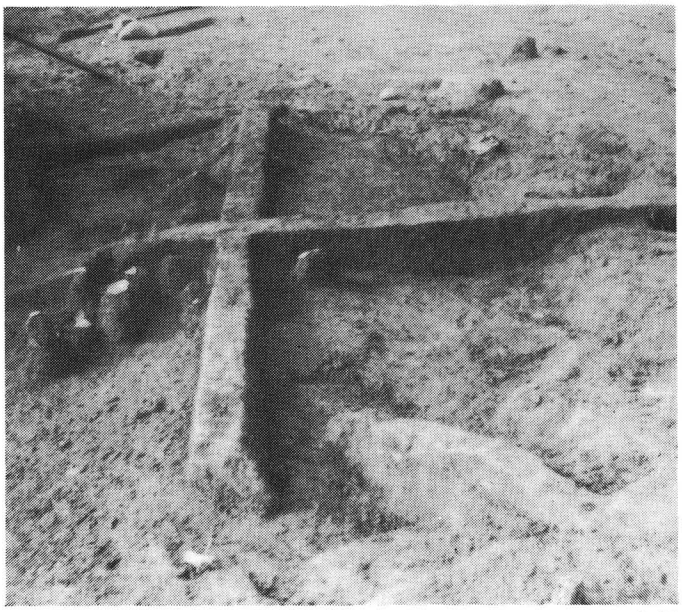
2．D地区調査後の状況（西から）

図版 4

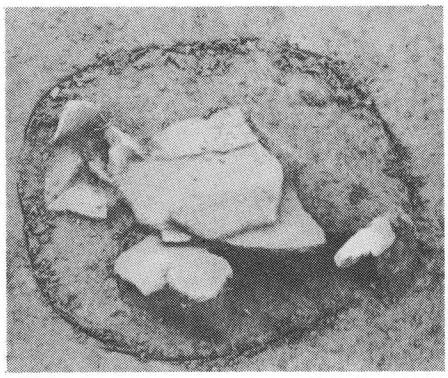
1．D地区発掘調査風景（西から）

2．D地区SI01･02（東から）

1．D地区SI01・02遺物出土状況



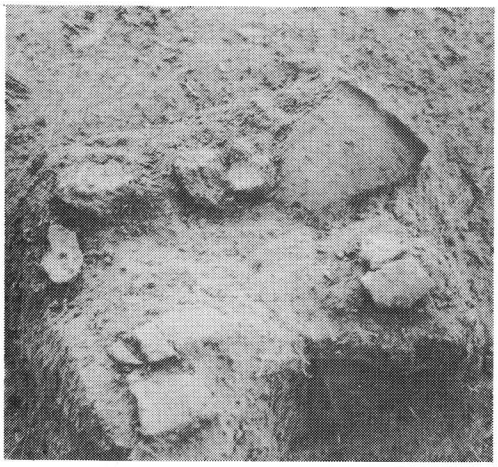
2．D地区SI01・02土層



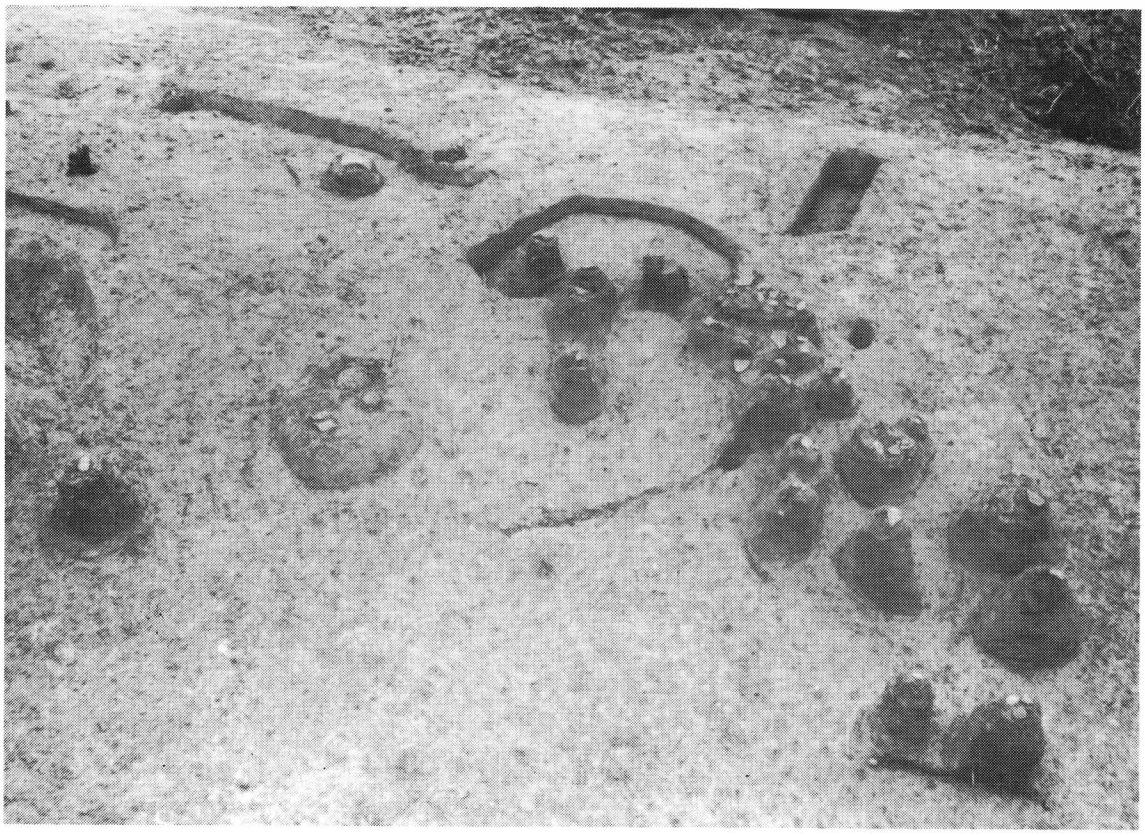
3．D地区SI01-PI遺物出土状況

図版６

１．Ｄ地区ＳＤ０１

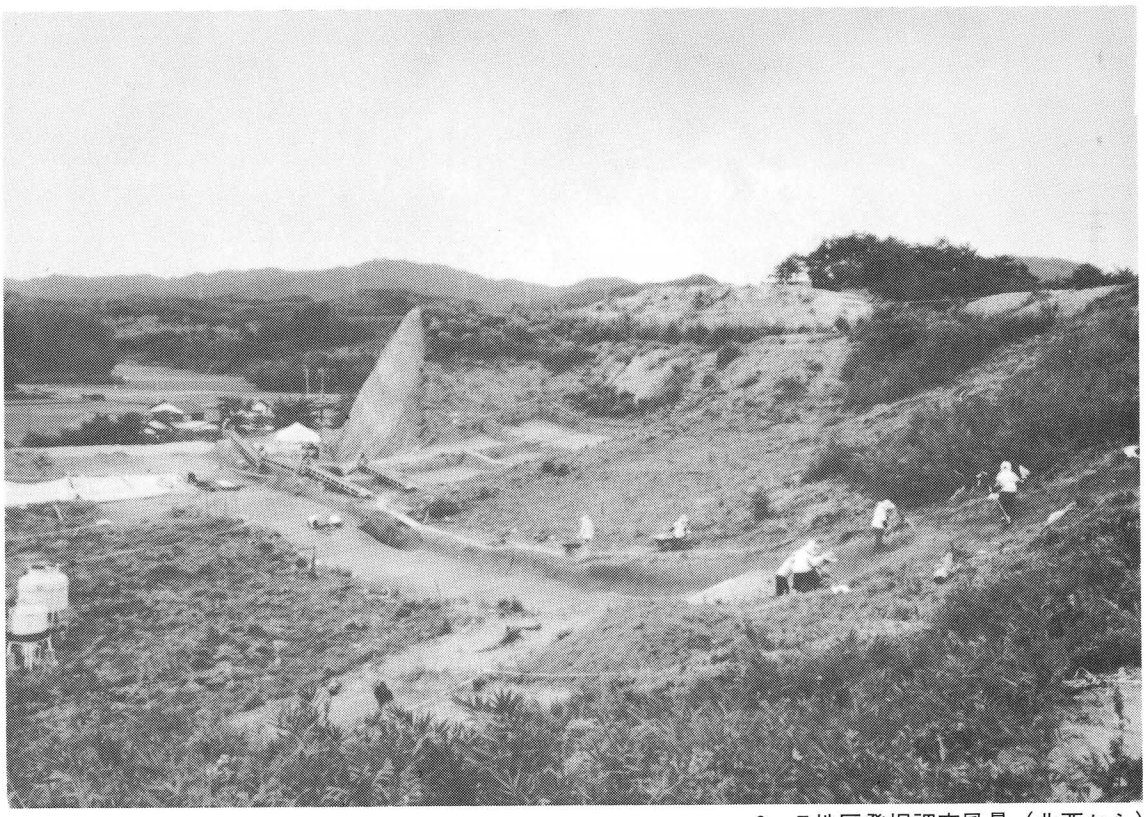


２．Ｄ地区ＦＩグリッド遺物出土状況



３．Ｄ地区ＳＤ04遺物出土状況

1．E地区発掘調査風景（南から）

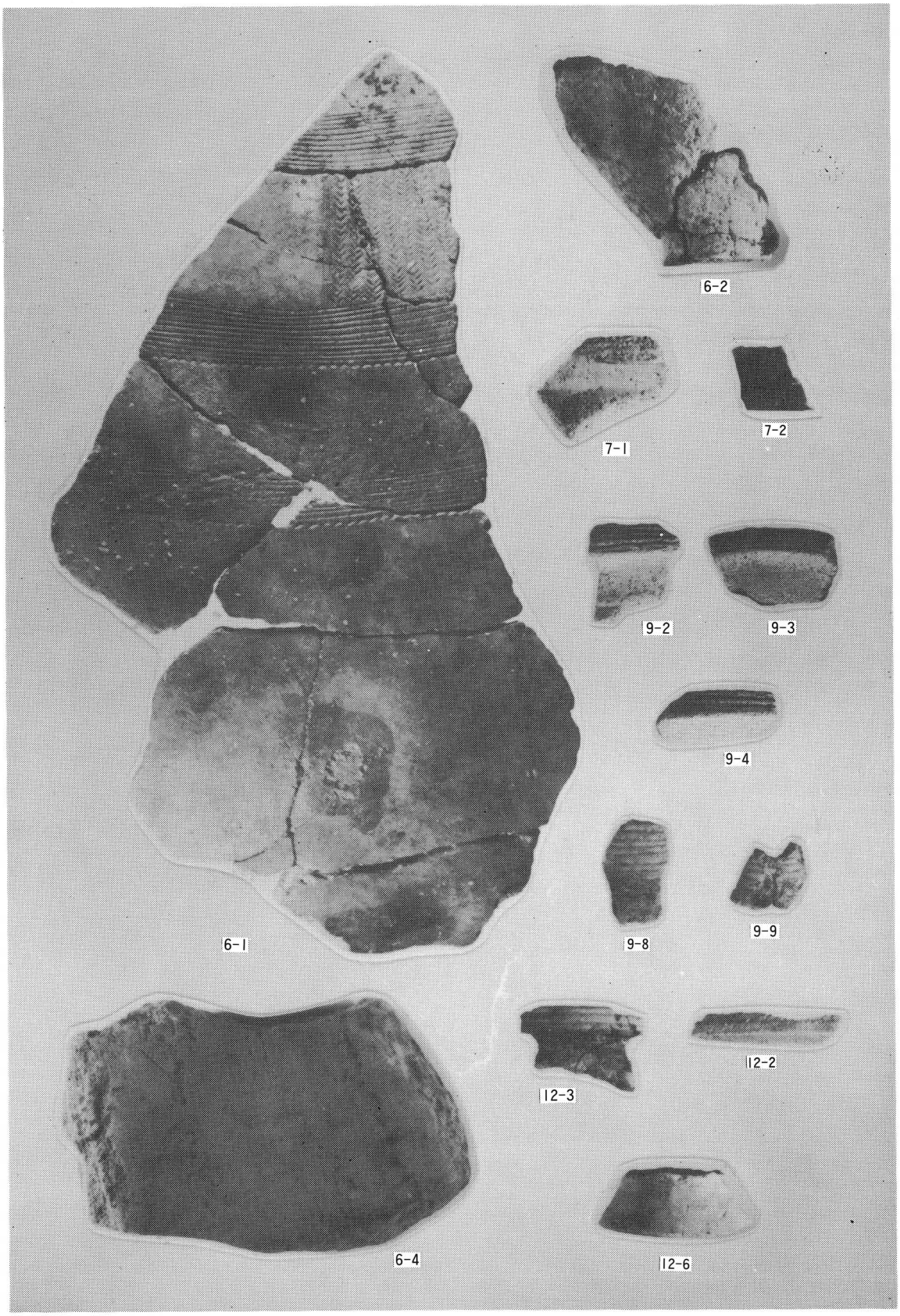


2．E地区発掘調査風景（北西から）

図版 8

1．E地区遺構配置

2．E地区SK01

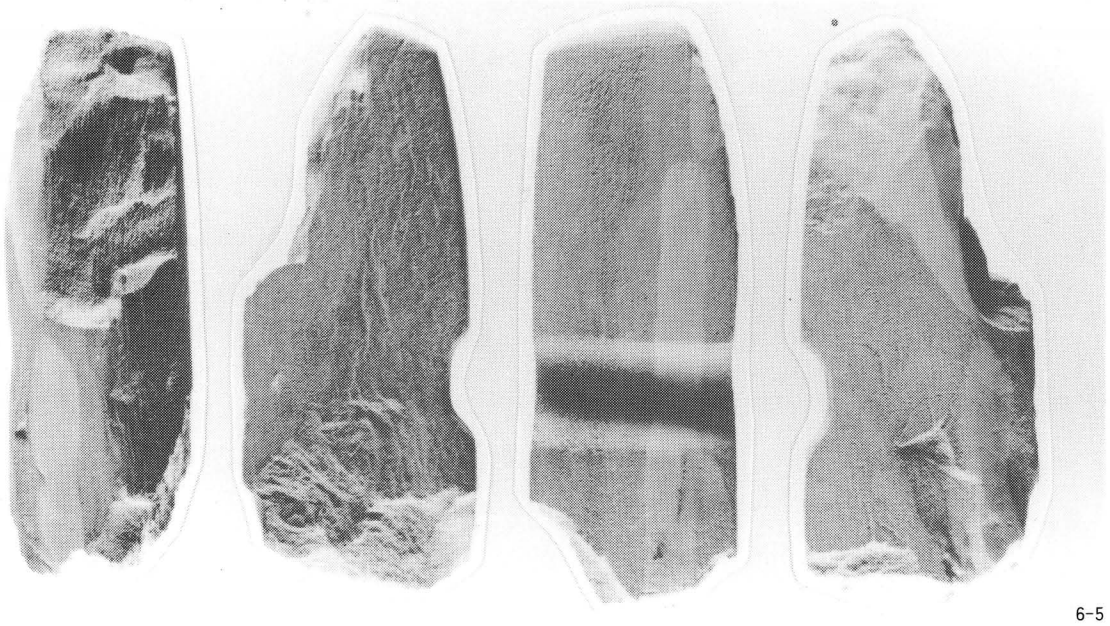


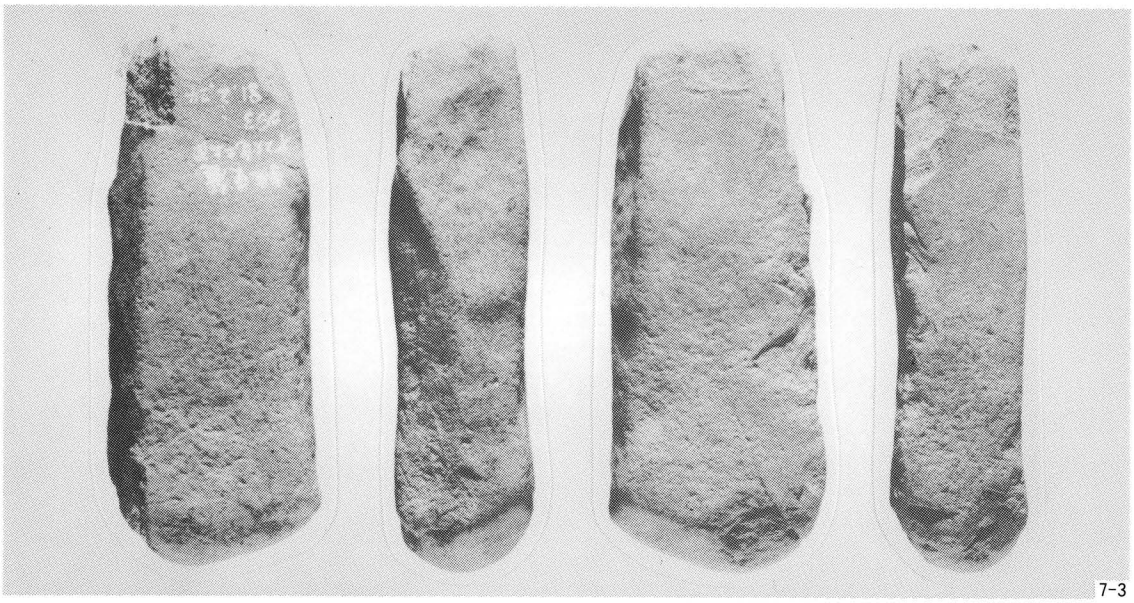
D地区ＳＩ01･02、ＳＤ01･02出土遺物

図版10

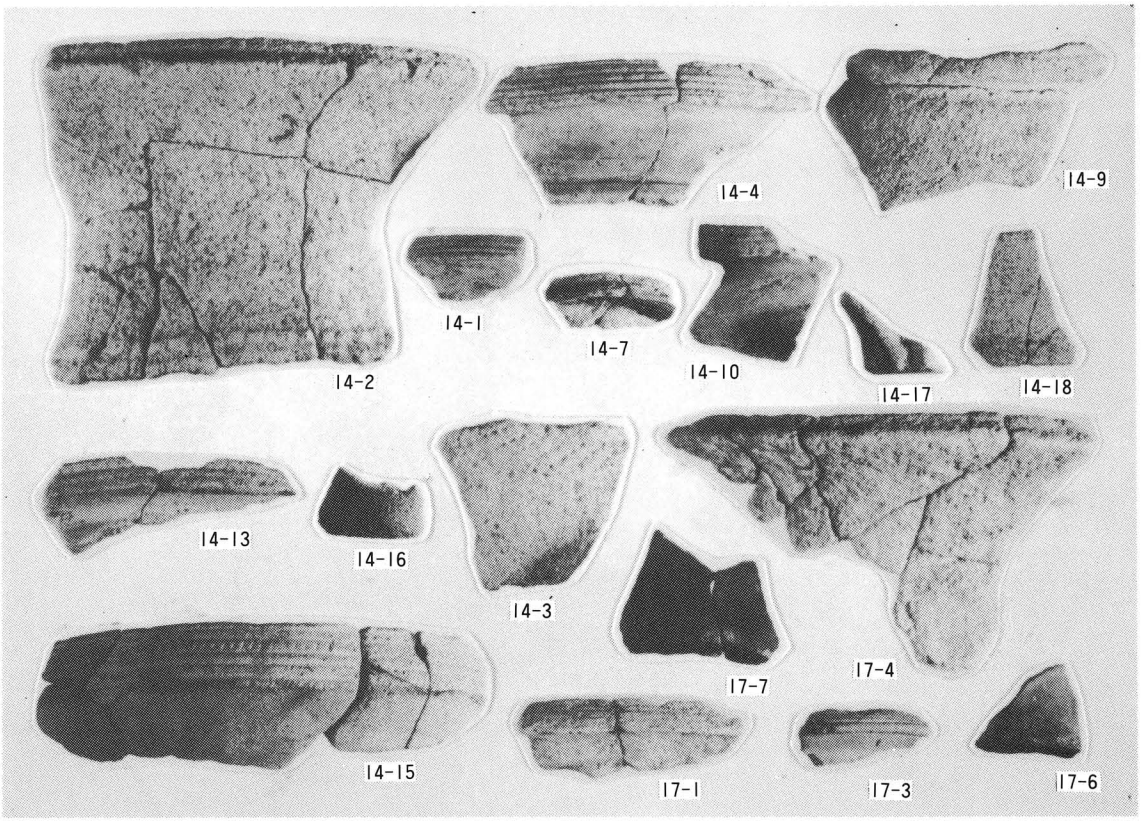
1．D地区SI01出土
凹石

2．D地区SI01出土
石斧

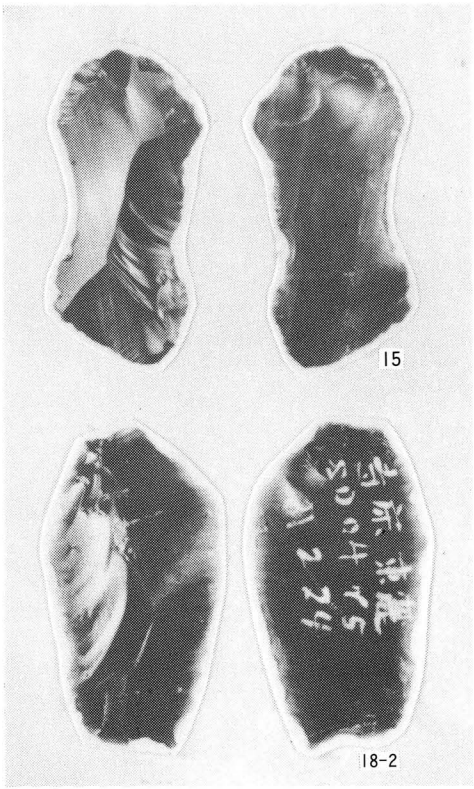


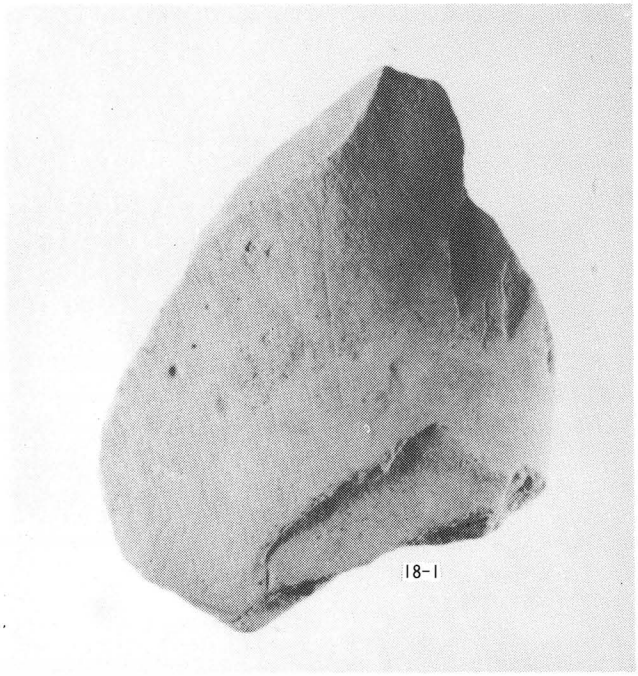


3．D地区SI02出土叩石



1．D地区ＳＤ03･04出土土器

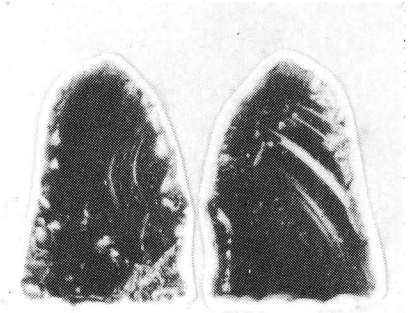




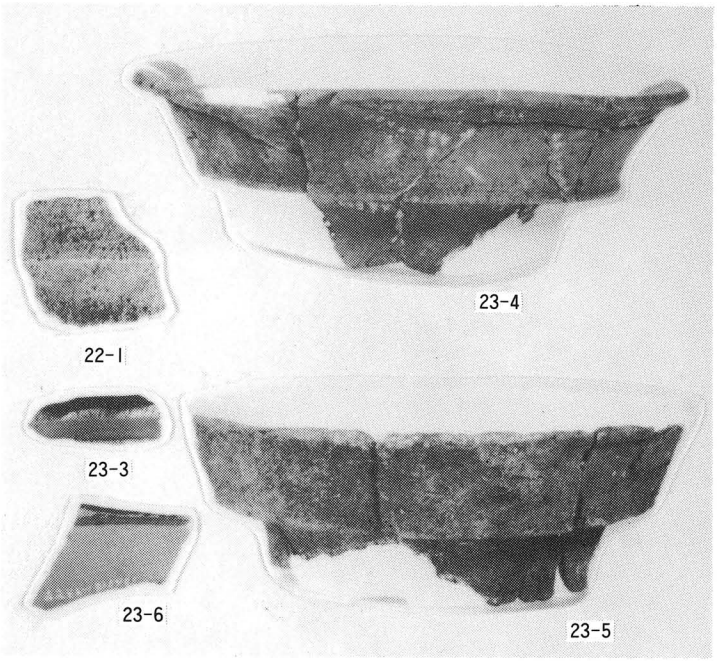
2．D地区ＳＤ03･04出土石器

19-1
19-2
19-3
19-5
19-8
19-6
19-7
19-4

1．D地区出土土器



2．E地区SK01出土石器



3．E地区E6・E7グリッド出土土器

昭和57年３月15日　印刷
昭和57年３月30日　発行

寺床遺跡発掘調査の概要
―D・E地区―

発　行　東出雲町教育委員会
島根県八束郡東出雲町揖屋
印　刷　松陽印刷所
島根県松江市西川津町